

る。突起は、残存2カ所の配置から、全部で4カ所と推定される。体部内面に被熱痕や煤の付着は見られない。なお、蓋76と口径が一致するが、一組であるか否かは不明である。87は別個体であるが、ほぼ同じ器形・大きさと考えられる。

ミニチュア土器及び棒状土製品については、86・87に範削りによる整形が見られる他は、全て手捏ねのみ

で成形される。胎土は粗雑で、焼成不良で、半還元状態で成る。

89は刀子である。茎尻を欠損するため、全長は不明で、刀身長は103.5mm、先幅8.5mm、元幅12.0mm、重さは14.8gである。刃部は僅かに研ぎ減りしている。目釘孔は確認されなかった。

第4表 第2号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	器色	残存率	付着物	備考
1	坏	(13.2)	(3.1)	(7.4)	W礫 W 織	B 青灰色	45		
2	坏	13.0	3.1	7.6	W礫 織	C 灰色	80		
3	坏	(13.0)	(3.7)	8.2	WB 織	C 灰色	35		
4	坏	13.0	3.5	8.5	W礫 W	D 灰色	80		
5	坏	13.1	3.5	8.0	W礫 WG	D 灰黄色	55		
6	坏	(14.9)	3.7	8.4	WG礫 BW	E 橙色	55		
7	坏	12.5	3.6	7.0	WB 織	C 灰色	70		大摩痕
8	坏	12.9	3.1	7.8	W礫 W	C 灰色	75		
9	坏	13.7	3.5	8.7	WG礫 WB	B 灰色	80		
10	坏	13.4	3.5	7.2	W	B 青灰色	88		
11	坏	12.8	3.3	6.8	G礫 WG	B 青灰色	90		大摩痕
12	坏	(12.7)	(3.6)	(7.6)	W礫 GW	B オリーブ灰色	40		
13	坏	(13.5)	(3.0)	(8.1)	W礫 織	B 青灰色	75		焼け割れ、歪み
14	坏	12.9	3.3	7.2	W 織	B 青灰色	90	内面室裏・砂	
15	坏	13.7	3.3	7.8	W 織	C オリーブ灰色	70		
16	坏	(12.4)	(3.4)	(7.9)	BW	B 灰色	50	底部室裏	
17	坏	13.3	3.2	7.2	BW 織	C 灰色	90		焼け歪み・割れ
18	坏	12.7	3.0	7.6	WB 織	D 鈍い黄色	100		焼け割れ
19	坏	(12.7)	(3.5)	(7.1)	W 織	C 灰色	30		
20	坏	(13.6)	(3.7)	(8.0)	W	C 灰色	35		
21	坏	(13.7)	(3.4)	(9.0)	W礫 WG	B 青灰色	30		
22	坏	(13.1)	3.4	6.9	W礫 W	C 青灰色	65		
23	坏	(12.7)	(3.1)	(7.7)	WGB R粘	C オリーブ灰色	20		
24	坏	(13.1)	(3.6)	(7.6)	W	C 青灰色	26		底面范描き文字「奉」
25	坏	(12.9)	3.6	7.5	WG	D 灰白色	70		
26	坏	(13.8)			B 織	D 灰黄色	30		
27	坏	(13.7)	(3.3)	(8.4)	RG 織	D 橙色	35		
28	坏	(13.0)	(3.2)	(8.0)	G G粘	D 灰黄色	35		
29	坏	(12.8)	(3.0)	(8.7)	W礫 RBG	D 灰黄色	40		
30	坏	(13.6)	(3.4)	8.0	WG礫 WG	E 浅黄色	65		
31	坏	(14.4)	(3.7)	(9.0)	BGW礫 粘	D 灰白色	60		
32	坏	(13.3)	(3.6)	(7.2)	B G粘 織	D 灰白色	45		
33	坏	(13.5)	(3.7)	(8.2)	WG礫 W 鉄	E 浅黄色	40		
34	坏	(7.3)			W	B 青灰色	底部60		底面黒香「登」
35	坏	11.0	2.2	7.7	W礫 W	C 灰色	80		小形坏
36	碗	(12.7)	(5.7)	(5.7)	W礫 WB	C 緑灰色	40		
37	坏	(13.0)	(3.2)	(8.0)	RG 織	E 鈍い黄褐色	40		
38	碗	16.7	5.8	9.8	W礫 WGB	C 緑灰色	80	自然釉	
39	碗	17.2	5.6	10.5	W礫 W	B 灰色	95		底部焼け歪み (二次被熱)
40	碗	(17.1)	(6.1)	(10.0)	WG礫 W	B 灰色	60		底部二次被熱
41	碗	(17.6)	(6.4)	(10.0)	GW礫 W	B 緑灰色	45		

第5表 第2号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	変色調	残存率	付着物	出土
42	碗	(17.8)	(6.1)	(10.1)	W礫 G	C 灰白色	30		
43	碗	(18.0)	(5.8)	(9.3)	W礫 W	B 青灰色	60		
44	碗	(16.0)	(5.2)	(9.6)	GW 織	B 青灰色	10		
45	碗			(8.0)	WR礫 針	C 灰色	底部破片		
46	蓋	(18.2)	(3.3)		W礫 W	B 青灰色	80	窯変	南北企製と思われる 内外面焼けはじけ
47	蓋	(18.9)	(3.3)		W礫 W	B オリーブ灰色	30		
48	蓋	(19.3)	(4.0)		WG やや織	C オリーブ灰色	45		
49	蓋	(18.4)			W	B 青灰色	60	外面砂粒	
50	蓋	(16.0)	(3.3)		WB	B 青灰色	75		焼成時焼け歪み
51	蓋	(18.9)			W礫 W	C 青灰色	30	赤色物質(丹?)	
52	蓋	(18.0)			W	E 灰白色	口縁部25		
53	蓋	(18.3)			WG礫 WG	C 緑灰色	40		焼成時焼け歪み
54	蓋	(19.9)			WG礫 BW R粘	D 灰黄色	40		
55	蓋	(19.5)			WGB	C 青灰色	30		外面風化著しい、砂粒が浮き出ている
56	蓋	(18.0)			W	C 灰色	20		焼成時焼け歪み
57	蓋	(21.5)			WG礫 W	C 鈍い橙色	50		頂部内面ヘラケズリ
58	蓋	(22.0)			W礫 W	B 灰色	口縁部20		佐波理模倣陶の蓋
59	高台付盤	14.8	2.4	10.6	W	C 灰色	75		焼け歪み(焼成時?)
60	高台付盤	(20.2)	(2.15)	(11.2)	W礫 W	B 青灰色	40		
61	高台付盤	(21.7)	(3.7)	(16.0)	W礫 GBW R粘	D 灰オリーブ色	75		
62	盤	(15.3)	(2.5)		WB	B 青灰色	35		
63	蓋	(15.7)			W礫 BW	B 灰色	口縁部10		
64	蓋	(26.0)			WG礫 WGB	B 灰色	口縁部50		SJ1-8と接合
65	鉢	(26.8)			GB G粘	E 灰白色	口縁部25		
66	鉢	(19.8)			W礫 W	B 緑灰色	口縁部5		
67	鉢	(22.1)			WB	C 灰色	10		
68	甕?	(11.3)			G礫 WB	D 灰白色	底部40		
69	甕?	(12.6)			B	D 灰白色	底部30		
70	甕?		(15.0)		W礫	B 青灰色	底部10		
71	短頸甕				WB	C 灰色	肩部20		
72	水瓶				W G粘	B 灰色	肩部30	窯変、自然釉	
73	長頸甕		(10.0)		W織	B 橙色	30		
74	コップ形	(7.1)	6.8	4.2	BW 針	C 青灰色	75	内面に墨状の物質	容量約135cc、南北企製と思われる。
75	鉄鉢形	24.3	10.2		W礫 W 針	B 青灰色	80		南北企製と思われる
76	ニチュア土器	5.2			WG 石英	D 鈍い黄色	70		蓋、内面煤付着
77	ニチュア土器	(4.4)	2.1	(3.4)	WG 鉄	D 鈍い黄色	20		柄?
78	ニチュア土器	(4.6)	1.6	(3.1)	BWG 石英 鉄	D 鈍い黄色	口縁部10		鉢?
79	ニチュア土器	(3.8)	1.4	(2.6)	WG 鉄	D 明赤褐色	口縁部10		鉢?
80	ニチュア土器	(4.0)			WG 鉄	D 明赤褐色	口縁部25		長頸瓶?
81	棒状土製品				WG 鉄	D 鈍い黄色	部分		直径9mm
82	棒状土製品				WG 鉄	D 鈍い黄色	部分		直径12mm
83	棒状土製品				WG 鉄	D 鈍い黄色	部分		長さ13mm、短径10mm
84	棒状土製品				WG 鉄	D 鈍い黄色	部分		直径12mm
85	棒状土製品				WG 鉄	D 鈍い黄色	部分		直径11mm
86	ニチュア土器	5.2	4.5		BWG 石英 鉄	D 鈍い黄色	70		獣脚(3脚)付香炉
87	ニチュア土器				WG 鉄	D 鈍い黄色	45		獣脚付香炉
88	鉢	19.3			WGB礫 WGB	C 灰色	45	内面赤色物質?	鋭指き文字
89	鉢				W礫 WGB	C 灰白色	口縁部破片		外面格子目叩き
90	甕				WB	A オリーブ灰色	体部破片		外面平行叩き
91	甕				W	A 暗緑灰色	体部破片		外面平行叩き
92	甕				WG礫 WGB	C 灰褐色	体部破片		外面格子目叩き、内面同心円当て具痕
93	甕				W	A 緑灰色	体部破片		外面平行叩き
94	甕				W礫 W	A 灰色	体部破片		外面平行叩き

第3号住居跡（第90図）

E 9グリッドに位置する。埋没谷の北側斜面部に立地する。南西約1.5mには第2号住居跡が存在する。

住居跡の平面形は、ほぼ方形で、北東及び北西隅が丸い。規模は主軸長2.97m、東西幅3.35m、深さ0.21m前後であった。主軸方向はN-31°-Wである。

壁は、開き気味に立ち上がる。壁溝は、南西隅及び西壁の一部で検出したが、不明確であった。

床面は明確な硬化面を持たない。貼床は検出されなかった。

ピットは3基を検出したが、柱穴と判断できるものはなかった。カマド焚口付近のP1は、楕円形で、規模は長径42cm、短径31cm、深さ2cmであった。底面が赤く焼けて硬化しており、炉のような施設と考えられる。

カマドは、北壁中央に構築されていた。規模は全長0.94m、幅0.80mであった。焚口～燃焼部は方形に近い浅い掘り込みで、底面は赤く焼けて硬化していた。煙道部は、住居の壁から僅かに突出する程度であった。袖部に相当するものとして、カマド左側に地山の掘り残しを確認したが、それ以外は不明確である。カマド内からは、瓦及び焼けた自然礫が多く出土しているが、これらについては、カマドの壁面や袖部、天井などの補強に使用されていたものと考えられる。

カマドの右側、住居跡北東隅近くでは貯蔵穴が検出された。楕円形で、規模は長径47cm、短径38cm、深さ11cmであった。底面近くには、焼土が堆積し、その上にはカマドの補強に使用されていたと思われる焼けた自然礫が流れ込んでいた。

住居跡の時期は、出土遺物から9世紀末～10世紀と考えられる。

出土遺物（第91～94図）

高台付椀2は貯蔵穴、土師器甕5・6及び瓦9・13・15～17はカマド、瓦11はP1の出土である。他の遺物は、床面付近で広く散乱して出土した。

1は還元焰焼成の環である。底部調整は、回転糸切り離した後未調整である。

2・3は酸化焰焼成の高台付椀である。2は比較的緻密な胎土を持つ。底部回転糸切り離した後、体部下端に断面三角形の低い高台を貼付する。

4～8は酸化焰焼成の甕である。いずれも小礫や酸化鉄粒を多く含む粗い胎土で、器壁は比較的厚めである。4～6・8は、僅かに開く短い口縁部を持つ。風化のため器面調整は不明である。

9～18は瓦である。いずれも近在の窯跡から採取してきて、カマドの補強等に転用したものと考えられる。9～13は丸瓦、14～18は平瓦である。

第4号住居跡（第95図）

G6・H6グリッドに位置する。埋没谷の開口部北側、西から東へ突出する低い尾根の先端近くに立地する。第1～3号住居跡の集まる区域から北東に約40mの位置である。住居跡の東壁付近は調査区外になる。

住居跡の平面形は、横長の長方形である。規模は主軸長3.16m、東西幅4.97m以上、深さ0.42m前後であった。主軸方向はN-3°-Wである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は、カマド付近及び南壁の南西隅付近を除いて全周する。壁溝内では、円形で直径約6cm、深さ約7cmで、住居内側に向かって斜めの掘り込みを持つ小ピットが10基検出された。

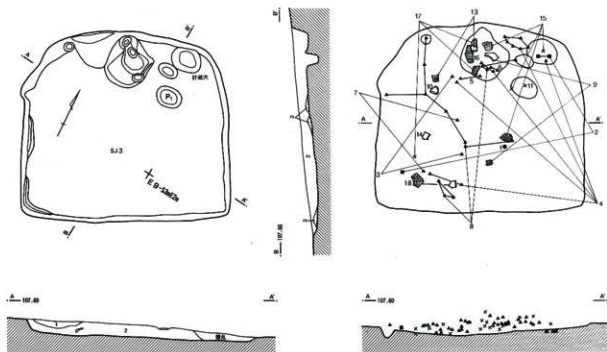
床面は明確な硬化面を持たない。

ピットは7基を検出したが、柱穴と判断できるものはなかった。住居西半部中央で検出したP3は、楕円形で、規模は長径35cm、短径22cm、深さ5cmであった。覆土には、植物質の繊維が観察できる炭化物を多量に含み、底面は赤く焼けて硬化していた。

また、東側調査区外にかかる部分では、炉跡と考えられる施設を検出した。長径113cm以上、短径80cmの長楕円形で、深さ10cm、底面は部分的に赤く焼けて硬化していた。

カマドは、北壁に構築されていた。規模は全長1.12m、焚口幅0.56mであった。焚口～燃焼部は楕円形の浅い掘り込みを持ち、底面及び壁面は、赤く焼けて硬化していた。煙道部は、燃焼部から若干の段をもって

第90図 第3号住居跡



SJ3

- 1 暗褐色土：均質
- 2 暗褐色土：焼土粒・炭化 しまりややあり
- 3 暗灰褐色土：しまりあり

SJ3カマド

- a 暗褐色土：焼土粒・炭化粒・黄褐色粘土粒 しまり弱
- b 赤褐色土：固く焼ける しまりややあり（火床面）
- c 暗黄褐色土：黄褐色土と暗褐色土が混合 しまりあり
- d 暗褐色土：焼土粒・炭化粒 しまりややあり

SJ3貯蔵穴

- a 暗褐色土：焼土粒・炭化粒・黄褐色粘土 しまり弱
- b 赤褐色土：焼土主体 炭化物・黄褐色粘土 しまり弱

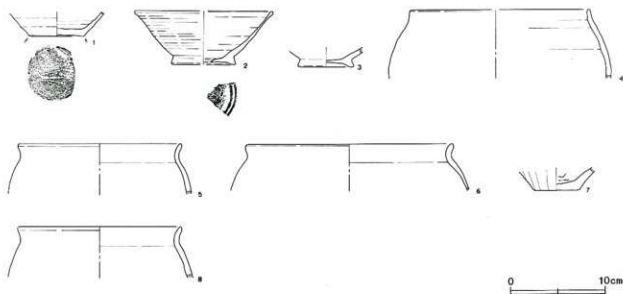
SJ3ピット

- a 暗褐色土：焼土粒・炭化物粒
- b 赤褐色土：固く焼けた焼土 しまりあり

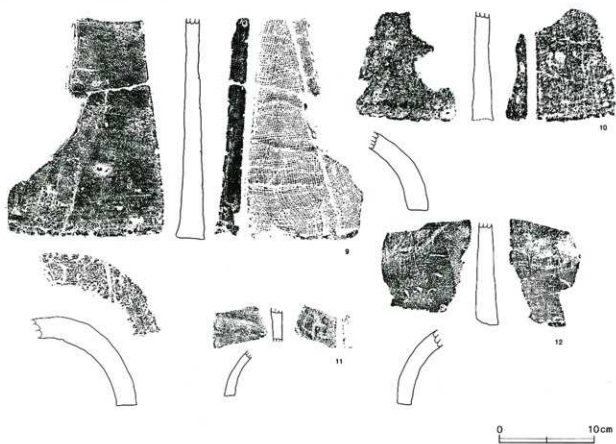
(凡例)

- 環
- ▲ 土師器甕
- 櫛
- × 瓦

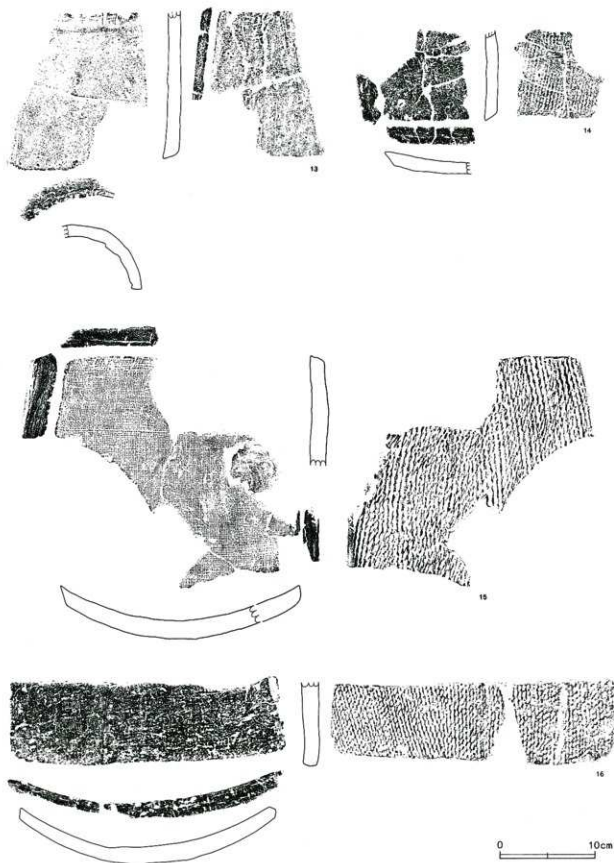
第91图 第3号住居跡出土遺物(1)



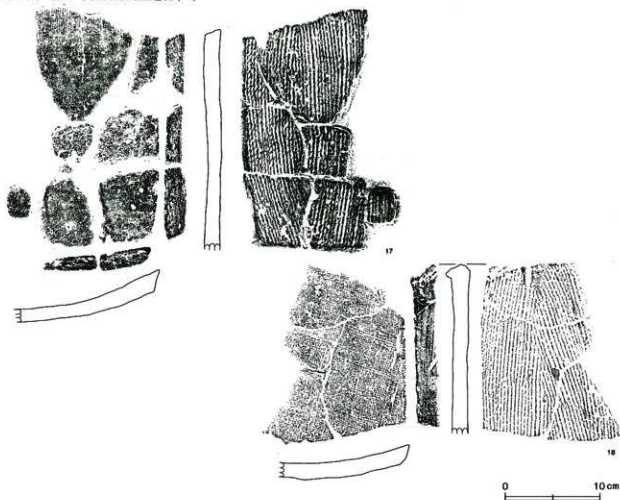
第92图 第3号住居跡出土遺物(2)



第93図 第3号住居跡出土遺物(3)



第94図 第3号住居跡出土遺物(4)

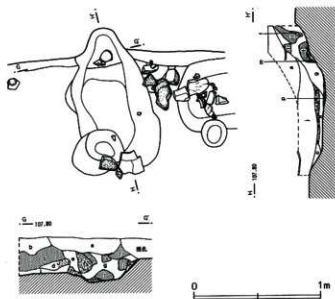
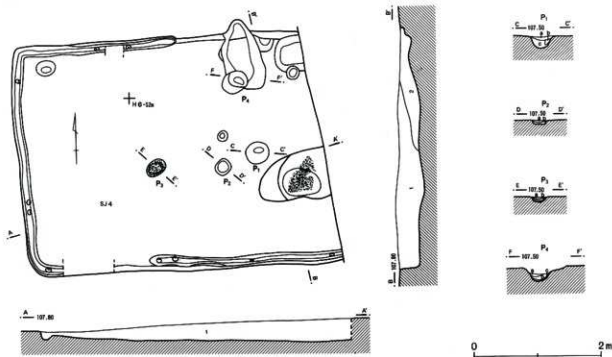


第6表 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	濃度	色調	残存率	付着物	備考
1	坏			5.8	W礫 W	B	灰色	底部98		
2	高古付碗	(14.7)	(5.7)	(6.5)	W礫 GWB	C	橙色	25		
3	高古付碗	(6.0)			WG 鉄	D	橙色	底部98		
4	甕			(19.2)	GW礫 鉄	E	鈍い黄橙色	口縁部25		酸化焙焼成
5	甕	(17.4)			GW礫 鉄	E	鈍い黄橙色	口縁部破片		酸化焙焼成
6	甕	(22.0)			GW礫 鉄	E	鈍い黄橙色	口縁部破片		酸化焙焼成
7	甕	(17.4)			GW礫 鉄	E	鈍い黄橙色	底部60		酸化焙焼成
8	甕			5.0	GW礫 鉄	E	鈍い黄橙色	口縁部破片		酸化焙焼成

番号	種別	広端	狭端	長さ	厚さ	胎土	濃度	色調	残存	凹面	凸面	端面	側面
9	丸瓦				1.5~2.8	WG礫 WG	B	灰	30	布目5×5 粘土紐	ナデ調整(横)縄目	ナデ調整	篋削り
10	丸瓦				1.3~2.2	WG礫 高礫 鉄	E	浅黄	破片	布目?	?	?	?
11	丸瓦				0.9~1.0	W	B	灰	破片	布目7×6	ナデ調整(横)縄目		篋削り
12	丸瓦				1.5~2.3	W 鉄	D	灰白	破片	布目7×8	ナデ調整		
13	丸瓦				1.2~1.5	W礫 WB	D	浅黄橙	破片	布目?	ナデ調整(縦)縄目	?	篋削り
14	平瓦				1.2~1.4	WG礫 高礫 鉄	E	灰白	破片	?	縄目3本	篋削り	篋削り
15	平瓦				1.4~2.0	WG	C	灰	50	布目6×6	縄目2本	篋削り	篋削り
16	平瓦		(26.0)		1.1~2.1	WG礫 高礫 鉄	E	鈍い黄橙	20	?	縄目3本	篋削り	篋削り
17	平瓦		(29.0)		1.3~1.8	WG礫 高礫 鉄	E	灰白	25	?	縄目3本	篋削り	篋削り
18	平瓦				1.5~1.8	GB礫 高礫 鉄	E	橙	15	布目?	縄目3本	無調整	篋削り

第95図 第4号住居跡



SJ4カマド

- a 暗褐色土：黄白色砂質粘土多 くされ礫 しまりなし
- b 暗褐色土：黄白色砂質粘土少 しまりなし
- c 黄白色粘土礫：(袖構築材) 黄白色粘土を混じる
- d 暗褐色土：焼土・黄白色砂質粘土・くされ礫 しまりなし
- e 暗褐色土：黄白色砂質粘土・くされ礫多(天井or袖材の流れ)
- f 赤褐色土：1層と同質(天井or袖材の流れ)焼けて赤色化
- g 暗褐色土：f層より黄白色くされ礫少 しまり弱
- h 暗褐色土：黄白色くされ礫・焼土多
- i 暗褐色土：黄白色土粒子微(カマド基礎)しまりあり

SJ4

- 1 暗褐色土：炭化物粒・焼土微粒少 ϕ 1cm礫少
- 2 暗褐色土：炭化物粒・焼土微粒多 くされ礫(カマド袖材)多

SJ4ビット1

- a 暗褐色土：焼土・黄色粘土・炭化粒多 しまりなし
- b 暗褐色土：焼土多 炭化粒少 しまりなし
- c 暗褐色土：地山土に近いがしまりなし

SJ4ビット2

- a 暗褐色土：焼土・黄色粘土・炭化粒多 しまりなし
- b 暗褐色土：地山土に近いがしまりなし

SJ4ビット3

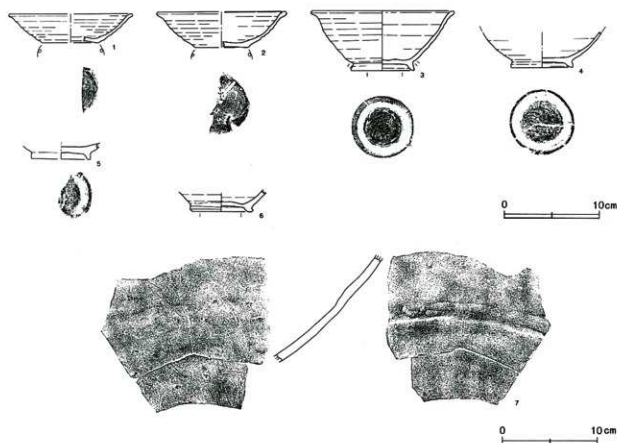
- a 暗褐色土：炭化物(植物質)多
- b 赤褐色土：固く良く焼けている

SJ4ビット4

- a 暗褐色土：焼土粒・炭化物粒少 しまり弱
- b 黒褐色土：焼土粒・炭化物粒多 しまり弱
- c 暗褐色土：焼土粒・炭化物粒少

- j 暗褐色土：焼土粒子少 黄白色粒子微 しまりなし
- k 赤褐色土：焼土多 焼けて赤色化
- l 黄白色粘土礫：(天井部崩落)
- m 赤褐色土礫：1層と同質(天井部崩落)焼けて赤色化
- n 暗褐色土：焼土微粒・炭化物微粒微 しまり弱
- o 黒褐色土：焼土微粒・炭化物微粒多 しまり弱
- p 赤褐色土：焼土多 焼けて赤色化

第96図 第4号住居跡出土遺物



第7表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	付着物	備考
1	坏	(13.2)	(3.1)	(6.1)	WB	B	灰色	口縁部20		
2	坏	(13.8)	(3.8)	5.6	W礫 WB	C	浅黄色	45		酸化焙焼成
3	高台付碗	15.2	6.3	6.7	W礫 WB	C	灰色	80		
4	高台付碗	6.5			G礫 GW鉄	E	浅黄色	30		
5	高台付碗	(6.2)			WG 鉄	C	浅黄色	底部破片		酸化焙焼成 内黒
6	高台付碗				W礫 WBG	C	灰色	底部75		
7	甕				W礫 WB	B	オリーブ灰色	体部破片		

住居外に20cmほど延びる。袖部は、カマド右側に僅かに地山の低い掘り残しのみを確認した。

カマドは、「腐れ礫」混じりの黄白色粘土で構築されていたと思われる。また、カマド及び貯蔵穴周辺で多く検出された焼けた自然礫は、カマド構築の補強材と考えられる。なお、カマドの土層の内、c層は袖部構築土。1層は天井部の崩落。f・m層は1層（天井部）内面が赤く焼けた部分である。火焼面は、k層とp層の2面が検出された。

貯蔵穴は、カマド右側で検出された。東半部は調査区外にかかっている。平面形は隅丸長方形で、長軸長m不明、短軸長0.56m、深さ0.22mであった。貯蔵穴内には、カマド補強材の焼けた自然礫が大量に流れ込んでいた。

住居跡の時期は、出土遺物から9世紀末～10世紀と考えられる。

出土遺物（第96図）

高台付碗4はカマド煙道部、甕7は同焚口部からの

出土。坏1及び高台付椀3は炉跡南側の、坏2及び高台付椀6はカマド西側のほぼ床面の出土であった。内黒の高台付椀5は覆土内の出土である。なお、炉跡北側から「コ」字裏と思われる土師器小片が出土した。

1・2は坏である。1は還元焰焼成で、底部調整は回転糸切り離し後未調整。2は明らかに酸化焰焼成であるが、後述の森坂遺跡出土のものより、薄く軽い。底部調整は回転糸切り離し後未調整である。

3～6は高台付椀である。3・4・6は還元焰焼成である。3はほぼ完形で、やや体部に膨らみを持つ。高台の作りは丁寧で、焼成も良好である。5は酸化焰焼成で、内面に黒色処理を施し、範磨きを加える。

7は甕の体部破片で、外面に平行叩き痕を残す。

(2) その他の遺構

第1号土壌 (第97図)

C9グリッドに位置する。埋没谷の北側斜面部に立地する。平面形はほぼ円形で、規模は長径1.14m、短径1.12m、深さ0.24mであった。覆土中から土師器・須恵器が小片で出土している。遺物及び覆土の状況から、時期は奈良或いは平安時代と推定される。

第2号土壌 (第97図)

F14グリッドに位置する。埋没谷の南側尾根部に立地する。第2号溝跡に切られていた。平面形はほぼ円形で、規模は直径1.14m前後、深さ0.19mであった。

風化した土師器片が出土したが、時期は不詳である。

第3号土壌 (第97図)

G14グリッドに位置する。埋没谷の南側尾根部に立地する。第1号溝跡に部分的に切られていた。平面形は楕円形で、規模は長径1.15m、短径0.98m、深さ0.41mであった。遺物は出土せず、時期は不詳である。

第4号土壌 (第97図)

E8グリッドに位置する。埋没谷の北側斜面部に立地する。平面形は細長い長方形で、規模は長軸長1.95m、短軸長0.60m、深さ1.42mであった。

遺物は出土しなかったが、形態から縄文時代の陥し穴と推定される。

第5号土壌 (第97図)

B10グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は一辺約0.60m、深さ0.10mであった。

覆土中から土師器・須恵器の小片で出土している。

覆土に焼土を多量に含むこと、黄白色粘土を多く含む部分があること、土師器・須恵器が出土していることから、炉跡乃至カマドのような施設である可能性があり、精査をおこなったが、不明確であった。

時期は平安時代と推定される。

第6号土壌 (第97図)

G6・H6グリッドに位置する。埋没谷の北側尾根部に立地する。平面形は楕円形と推定され、規模は長径不明、短径0.45m、深さ0.27mであった。遺物は出土せず、時期は不詳である。

第7号土壌 (第97図)

H5グリッドに位置する。埋没谷の北側尾根部に立地する。部分的に調査区外であった。平面形は円形乃至楕円形と推定され、直径1.10m程度、深さ0.30mであった。遺物は出土せず、時期は不詳である。

第8号土壌 (第97図)

H6グリッドに位置する。埋没谷の北側尾根部に立地する。部分的に調査区外であった。平面形は半円形で、規模は直径0.32m、深さ0.05mであった。壁面に焼けている部分があったことから、炉跡乃至カマドのような施設である可能性があり、精査をおこなったが、不明確であった。遺物は出土せず、時期は不詳である。

第9号土壌 (第97図)

E7グリッドに位置する。埋没谷の北側尾根部に立地する。平面形は楕円形で、規模は長径1.25m、短径0.98m、深さ0.22mであった。遺物は出土せず、時期は不詳である。

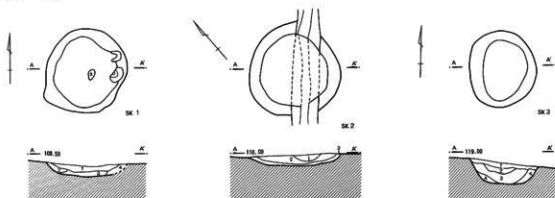
溝跡 (第98図)

埋没谷の北側尾根部で、3条の溝跡を検出した。第2号溝跡は、曲尺状に曲がっていた。

第1号溝跡と第2号溝跡は、等高線に直交する方向に走る。第3号溝跡は、埋没谷に平行する方向に走る。

いずれも、耕作等に係る近代の溝跡と考える。

第97図 土壌



SK 1

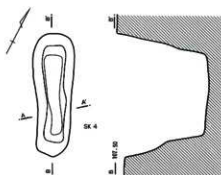
- 1 暗褐色土：炭化物・焼土粒少
- 2 暗褐色土：焼土粒多
- 3 黒褐色土：炭化物多 焼土粒少
- 4 黒褐色土：炭化物少

SK 2・SD 2

- 1 褐色土：粗粒 (m2覆土)
- 2 暗褐色土：焼土粒・炭化物粒少 (m2覆土)
- 3 暗褐色土：粘性強 (m2覆土)

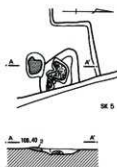
SK 3

- 1 暗褐色土：炭化物・焼土粒少 しまり弱
- 2 暗褐色土：炭化物・焼土粒多 しまり弱
- 3 暗黄褐色土：炭化物粒少 地山土粒多 しまり弱
- 4 暗褐色土：壁土崩落B.L. しまりややあり



SK 4

- 1 暗茶褐色土：黄白色粘土B.L. しまりややあり
- 2 黄白色粘土：しまりあり
- 3 暗茶褐色土：黄白色粘土 しまりあり
- 4 暗黄褐色土：しまりあり
- 5 黄褐色土：暗褐色土多 しまりあり
- 6 暗茶褐色土：しまりあり
- 7 暗黄褐色土：白色粘土多 しまりあり

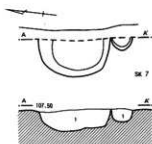


SK 5

- 1 暗褐色土：炭化物・焼土多 しまり弱
- 2 暗褐色土：黄白色粘土30-40% しまりやや弱

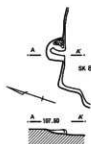
SK 6

- 1 暗褐色土：炭化物粒子微 しまりなし
- 2 暗褐色土：砂質 しまりなし
- 3 暗褐色土：地山土B.L.多



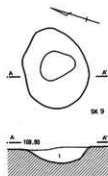
SK 7

- 1 暗褐色土：均質 しまりやや弱



SK 8

- 1 暗褐色土：炭化物粒・焼土粒微 しまりやや弱

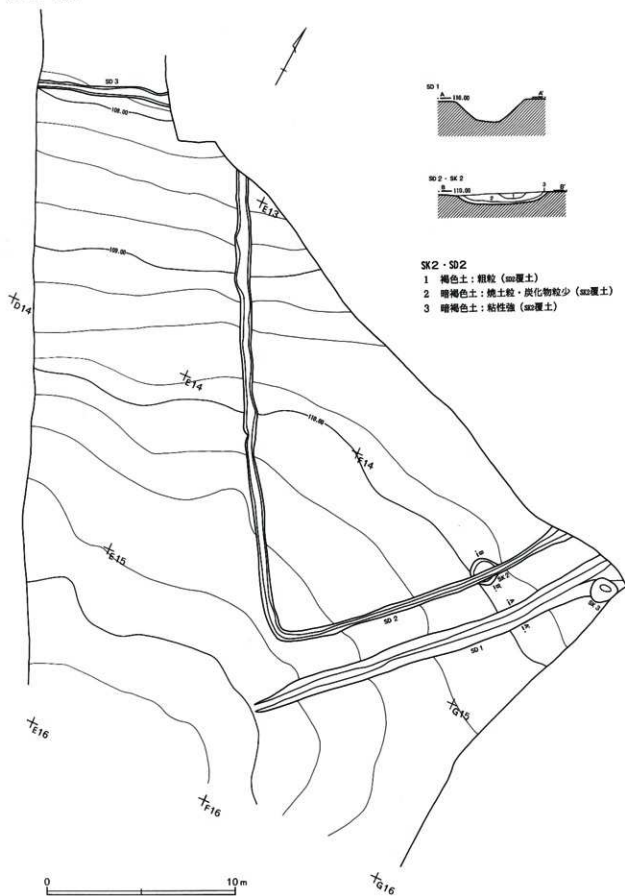


SK 9

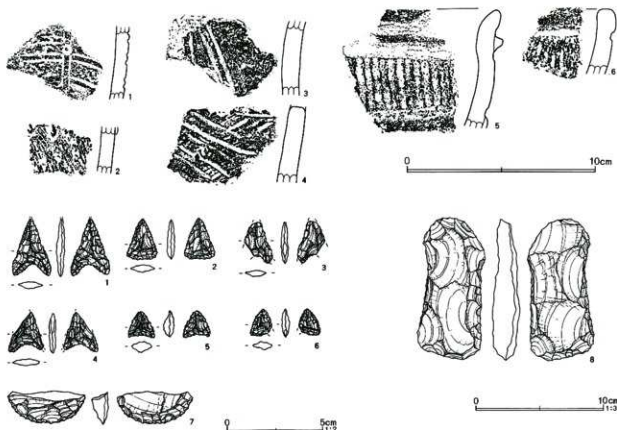
- 1 暗褐色土：均質 しまりやや弱



第98图 沟迹



第99図 グリッド出土遺物(1)



(3) グリッド出土遺物 (第99・100図)

縄文時代 (第99図)

1は半截竹管の平行沈線文で肋骨文を施文する諸磯a式で、2は瘤条の貼付文と刺突文の付く諸磯c式である。地文には細かい条線文が施文されており、刺突文は半截竹管状工具で行われている。3、4は所属時期不明であるが平行沈線文でモチーフを描くもので、4の地文には細かな条線文が施文される。諸磯c式に比定される可能性がある。

5、6は加曽利EⅠ式土器の口縁部文様帯であり、口縁部の地文に5は縄文を条が縦走する様に、6は縦位の燃糸文を施文する。

石器1～6は石磯である。1～3はチャート製、5～6は黒曜石製で、2、6が平基、他は凹基である。5、6は小型の石磯である。1、2、5は完形品である。7はチャート製のラウンド・スクレイパーと思われる、刃部のみ現存する。8はやや厚みのある短冊形の

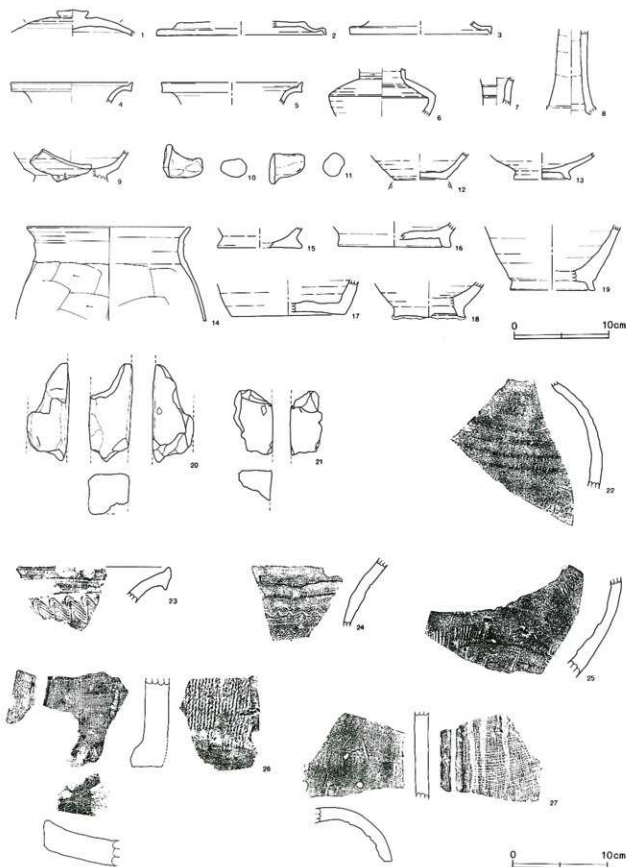
打製石斧である。縦11.1cm×横5.9cm×厚さ2.2cmで、重さ151gを測る。

奈良・平安時代以降 (第100図)

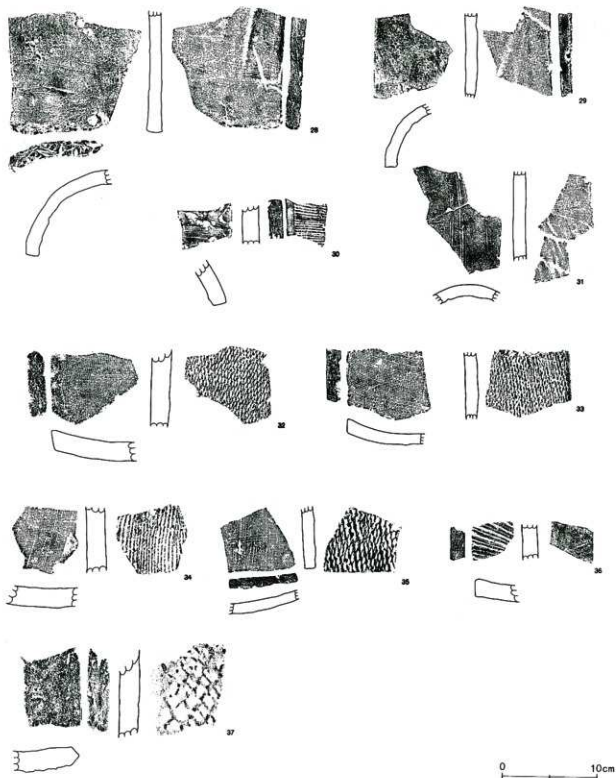
1～3は蓋で、2は内外面に段を作る器形で、佐波理模倣碗の蓋と思われる。4・5は長頸瓶の口縁部。6の長頸壺は、胎土に白色針状物質を含み、南比企窯跡群の製品と思われる。7・8は水瓶の頸部であろう。9は小片で、器種不明である。10・11は鉢の把手、12は坏、13は高台付碗か。14は土師器甕で、頸部は「コ」字状である。体部内外面には筥削りを施し、薄く仕上げている。15は酸化焰焼成の土器で、いわゆる「台状底部」に似るが、関連は不明確である。20はカマドの支脚、21は磚か。22・25は同一個体の壺。23・24は甕の口縁部である。

26～37は瓦である。26は軒平瓦、27～31は丸瓦、32～37は平瓦である。

第100図 グリッド出土遺物(2)



第101図 グリッド出土遺物(3)



第8表 グリッド出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	付着物	備考
1	蓋	(18.0)			WB磁	A	灰色	10		
2	蓋	(15.0)			WBG	A	灰色	口縁部破片		
3	蓋	(13.0)			WG	B	暗灰黄色	口縁部破片		
4	長頸瓶	(15.0)			WG	B	オリーブ黒色	口縁部破片		
5	長頸瓶	(15.0)			W磁 WG	B	にぶい赤褐色	口縁部破片		
6	長頸壺				W 針?	B	灰白色	底部25		
7	水瓶				W磁	B	にぶい黄褐色	頸部破片		
8	水瓶				WGB	B	灰色	頸部破片	自然釉	
9	?				G磁 W	A	暗灰褐色	?		
10	把手				G磁 粘	E	灰黄色	把手1		
11	把手				粘	E	淡黄色	把手1		
12	環			(5.8)	W磁 WG	D	にぶい黄褐色	底部70		
13	高台付鍋			6.0	W磁 WG	C	暗灰黄色	底部75		
14	土師器壺	17.4			WGB 鉄	C	にぶい橙色	口縁部55		
15	壺?			(9.0)	GB磁 鉄	E	明赤褐色	底部25		台状底部か、酸化焙焼成
16	壺?			(12.0)	WB	A	灰色	底部破片	自然釉 窯変	
17	壺?			(12.0)	WB	A	灰色	底部破片	自然釉 全体に照り	中世陶器、常滑?
18	長頸瓶?			(7.6)	W	B	灰色	底部破片	自然釉	
19	長頸瓶?			(9.0)	W磁 W	A	灰色	底部破片	融着 自然釉	
20	支脚?				WB磁 鉄	E	にぶい橙色	残欠		酸化焙焼成?
21	磚?				G磁 石英	C	灰白色	残欠		外面縦方向の丁寧な筈削り
22	壺				WG	C	にぶい赤褐色	肩部破片		
23	壺				WB	B	灰色	口縁部破片		樽掻き波状文
24	壺				W	A	灰色	口縁部破片		樽掻き波状文2段
25	壺				WG	C	にぶい赤褐色	底部破片		外面平行叩き痕→ナデ

番号	種別	広端	狭端	長さ	厚さ	胎土	焼成	色調	残存	凹面	凸面	端面	側面
26	軒平瓦				2.6~2.7	W磁 WB	B	灰	破片	布目7×7 周辺調整	縄目3本 周辺調整	筈削り	筈削り
27	丸瓦				1.4~1.6	W	A	黄灰	破片	布目7×6 周辺調整	筈削り(縦)		筈削り
28	丸瓦				1.2~1.6	WB	A	灰	破片	布目6×6	ナデ調整(横)	無調整	筈削り
29	丸瓦				1.2~1.4	WB	B	灰	破片	布目7×7 周辺調整	ナデ調整(横) 縄目消す		筈削り
30	丸瓦				1.8	W磁 W	A	灰	破片	柵目 周辺調整	ナデ調整(横)		筈削り
31	丸瓦				1.1~1.5	W磁 B	B	黄灰	破片	布目7×7 粘土紐	筈削り(縦)		筈削り
32	平瓦				2.1~2.2	WG磁 WG	D	灰黄	破片	布目10×11	縄目3本		筈削り
33	平瓦				1.1~1.5	WG磁 腐礫WG	C	灰	破片	布目7×6	縄目3本		筈削り
34	平瓦				2.0~2.2	WG磁 腐礫WG	C	黄灰	破片	布目6×6	縄目3本		筈削り
35	平瓦				1.2~1.4	W 鉄	C	淡黄	破片	布目7×6	縄目2本	筈削り	
36	平瓦?				1.7	B	D	にぶい黄褐色	破片	布目→平行筈	ナデ調整		筈削り
37	平瓦				2.1~2.2	WG磁	E	灰白	破片	?	周辺調整	格子目叩き	筈削り

VII 入間市森坂遺跡の調査

1. 遺跡の概要

森坂遺跡は、入間市上小谷田2丁目678番地他に所在し、加治丘陵でも東端付近の比較的起伏の小さい区域に立地する。標高は107～112m、入間川沖積地との比高差は約47mである。

加治丘陵は、北側と南側をそれぞれ入間川と霞川に挟まれているが、分水嶺が南に偏っているため、北東方向に向かって入間川に合流する小河川に開折された谷が発達している。

森坂遺跡の北端には北東に開く谷があり、森坂北遺跡との境界となっている。また、遺跡の南端にも、後述の土器焼成関連遺構群及び粘土採掘坑群が検出された谷が存在する。この谷も東側に開き、高倉小学校の西で秋津川の谷に合流する。秋津川は、このあたりから北流し、やがて入間川に注ぐ。この谷の南側は坂東山西遺跡となっている。また、本遺跡の西側一帯には県選定重要遺跡「東金子窯跡群」が展開している。

圏央道建設に伴う森坂遺跡の発掘調査は平成3・4年度にかけて実施し、埋蔵文化財包蔵地の範囲の増補分2,800㎡を加えた計11,800㎡を調査した。

調査の結果、10世紀前半の土器焼成関連遺構群（土器焼成遺構3基、土器捨て遺構1カ所、土壇4基、集石遺構1カ所）、粘土採掘坑群をはじめ、平安時代の住居跡1軒、溝跡2条、時期不詳の土壇8基、溝跡31条等の遺構を検出した。

土器焼成関連遺構群は、遺跡南端の谷の北側斜面部中位に立地する。粘土採掘坑群の分布域と重複しており、いずれの遺構も粘土採掘坑覆土上での検出であった。遺構群は、調査区南東隅部の200㎡ほどの狭い範囲に集中していた。各遺構からは、ロクロ成形で酸化状態の土器（坏・高台付坏・甕・碗・鉢等）が多量に出土した。これらには、緑釉陶器皿、浄瓶等が少量共伴していた。

粘土採掘坑群の調査は、重複する土器焼成関連遺構群の調査が終了した後に実施した。

粘土採掘坑群の分布域は、遺跡南端の谷部に限定され、調査区内だけで大小90基以上の粘土採掘坑が切り合った状態で検出された。調査区南東隅部付近が最も密集度が高く、西側の谷頭に近づくほどに粘土採掘坑の分布は稀薄になる。また、斜面部では、山側になるほど稀薄となり、標高108.00m前後が分布の北限であった。

土器焼成関連遺構群・粘土採掘坑群ともに、調査区内での分布状況から、更に東側調査区外に展開している可能性が高いと推測される。

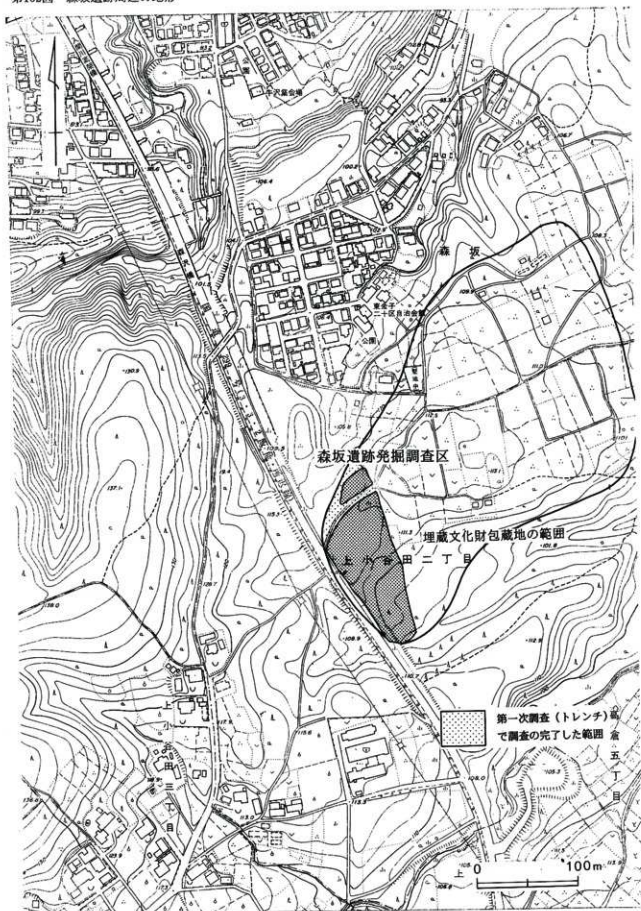
なお、坂東山西遺跡の発掘調査の結果、同じ谷の南側斜面部では土器焼成関連遺構群・粘土採掘坑群は、共に検出されなかった。

土器焼成関連遺構群と粘土採掘坑群については、土層観察で、粘土採掘坑（旧）⇒土器焼成遺構⇒粘土採掘坑（新）という関係が成り立ち、両者が併存し、関連をもって営まれた期間があった可能性を検討する必要がある。

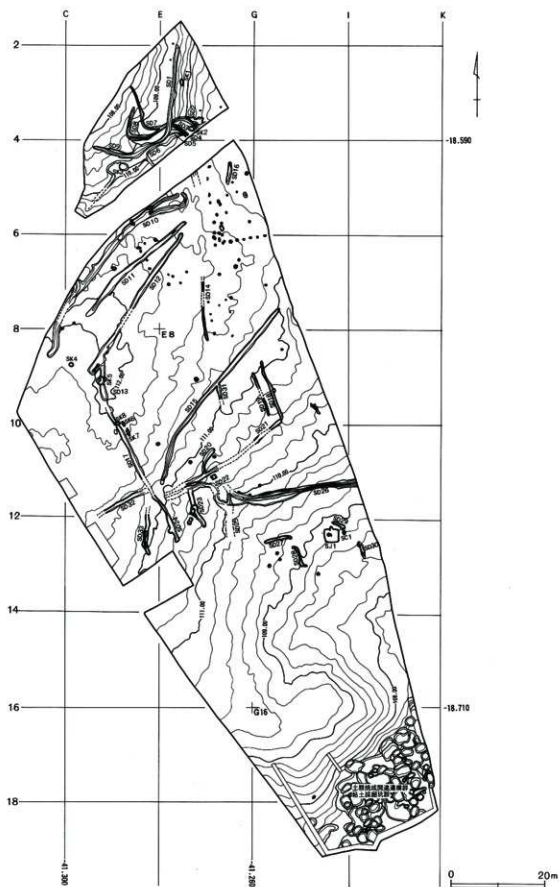
森坂遺跡は、縄文時代前・中期の遺跡として周知されていたが、今回の調査では縄文時代の明確な遺構は検出されなかった。遺物の散布状況及び地形等から推測して、縄文時代の遺跡は今回の調査区の更に東側に中心を持つものと思われる。

森坂遺跡の基本層序については、第125図のとおりである。谷部以外の区域では、表土直下の暗褐色粘質土（真土）上面を遺構確認面として調査を実施した。

第102図 森坂遺跡周辺の地形



第103図 森坂遺跡 全測図



2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第104図)

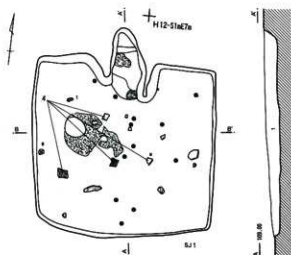
H12グリッドに位置する。土器焼成関連遺構群及び粘土採掘坑群から、北に約40m離れている。

住居跡の平面形は、ほぼ方形で、規模は主軸長2.85m、東西幅2.95m、深さ0.23m前後であった。主軸方向はN-6°-Wである。

壁は、開き気味に立ち上がる。

床面は明確な硬化面を持たないが、住居中央部や西壁寄りで、床面が赤く焼けて硬化している範囲が検出された。長径1m、短径65cmの不整楕円形で、特に掘り込みを持たない。性格は不明である。

カマドは、北壁中央に構築されていた。規模は全長1.11m、焚口幅0.39mであった。焚口～燃焼部は楕円第104図 第1号住居跡



SJ1

1 暗褐色土・焼土粒・炭化粒

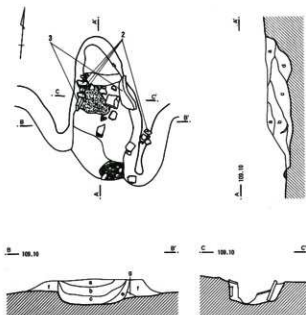


形に近い浅い掘り込みで、底面は部分的に赤く焼けて硬化していた。また、焚口付近には、炭化物の集中が見られた。煙道部は、燃焼部からやや段をもって延び、住居の壁から50cmほど突出する。袖部は、地山土（暗褐色粘質土）を用いて構築されていた。カマドの補強材として、瓦が多く転用されていた。

住居跡の時期は、詳細な時期を判定し得る遺物は出土していないが、9世紀と推定される。

出土遺物 (第105図)

平瓦3は、カマド側面を補強していた。丸瓦2はカマド内、平瓦4は住居中央床面、水瓶1は覆土内の出土である。なお、図示できなかったが、カマド内からは武蔵型甕と推定される薄い土師器甕の体部破片が出土している。

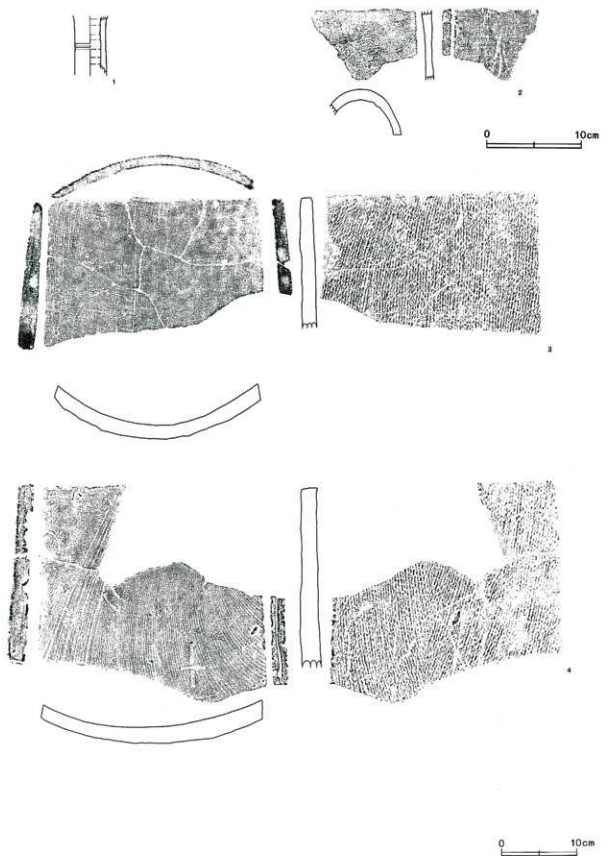


SJ1 カマド

- a 赤褐色土・焼土ブロック
- b 暗赤褐色土・焼土粒多
- c 暗赤褐色土・炭化粒多
- d 暗赤褐色土・焼土粒多 しまりあり (火床面)
- e 暗褐色土・焼土粒 (補強時の貼付)
- f 暗褐色土・地山土・焼土粒少 しまりあり (袖部)
- g 暗褐色土・炭化粒・焼土粒多



第105図 第I号住居跡出土遺物



第9表 第1号住居跡出土遺物観察表

表3-2 第1号住居跡出土遺物調査表													
券	器種	口径	器高	底径	胎土	濃	色調	残存率	付着物	備考			
1	水瓶				W硬 WB	A	暗灰黄色	頸部破片	自然釉				
券	種別	広端	炊端	長さ	厚さ	胎土	濃	色調	残存	凹面	凸面	端面	側面
2	丸瓦				0.9~1.4	W硬 黄緑	B	灰	破片	布目7×6	ナデ調整(横)縄目消す		縄削り
3	平瓦				1.5~2.1	W硬 WB	C	灰	45	布目7×7	縄目3本 周辺調整	縄削り	縄削り
4	平瓦				1.8~2.4	W硬 WB	C	浅黄	45	布目8×10 糸切り底「十」字ナデ	縄目3本	縄削り	縄削り

(2) 土器焼成関連遺構群

遺跡南端部の谷部北側斜面で、平安時代(10世紀)の土器焼成に関わると考えられる遺構群を検出した。

土器焼成関連遺構群は、粘土採掘坑群の分布域と重複しており、いずれの遺構も粘土採掘坑覆土上で検出したものである。

検出した遺構は、土器焼成遺構3基(SF1~3)、土器捨て遺構1箇所(SX4)、土壌4基(SK9~12)であった。遺構群は、谷部北側斜面(傾斜:1.2/10m)の中心(標高107.40~108.20m)で、J16~18グリッドにかけての約200mの範囲に集中して存在していた。今回の調査区では東南端に当たり、遺構群の分布は更に東側に展開している可能性が高いと推測された。

土器焼成遺構は、密閉性を高めて高温でもばら還元焰焼成を目的に行う須恵器窯とは異なり、比較的開放的な構造の施設と推定された。

出土遺物も、緑釉陶器皿・浄瓶などを除けば、赤褐色~橙色に焼き上がった土器が大半であった。器種は、杯・高台付杯・碗・甕・鉢・小形壺など多種にわたるが、全体もしくは部分の成形にロクロを使用しており、甕・鉢を含めて底面に回転糸切り離し痕が観察されるものが多い。

第1号土器焼成遺構(第107図)

J17グリッドに位置する。西側約1mに第2号・第3号土器焼成遺構が隣接する。遺構は、粘土採掘坑覆土を掘り込んでいた。

平面形は楕円形、掘り込みの断面形は皿状であった。規模は長径3.05m、短径2.32m、深さ0.32m前後である。主軸はN-36°-Wを指し、谷部等高線に直交する。

底面はほぼ水平で、山側の壁がやや高い。

焚口・煙道の特別な施設は見られず、前庭部・燃焼部・焼成部の区別も明瞭ではない。天井等上部構造については、焼土・炭化物を含まない第4層が注目されたが、土器を含み、被熱痕も見られなかった。

被熱痕跡は、底面中央部の1×0.85mほどの範囲で見られ、底面周囲及び壁には見られなかった。タール等の付着も観察されなかった。

第1・2層は、本遺構を切る粘土採掘坑覆土と思われる。第3層下部の炭化物・焼土は、第4・5層堆積後に再び焼成が行われた痕跡とも思えるが、明確ではない。第5層は灰層、第6層は底面の被熱部分で赤く焼けて硬化していた。第8層には、少量の炭化物・焼土及び土器が混じるが、本遺構に先行する粘土採掘坑覆土の可能性もある。

遺構の時期は、10世紀前半と考える。

出土遺物(第108図)

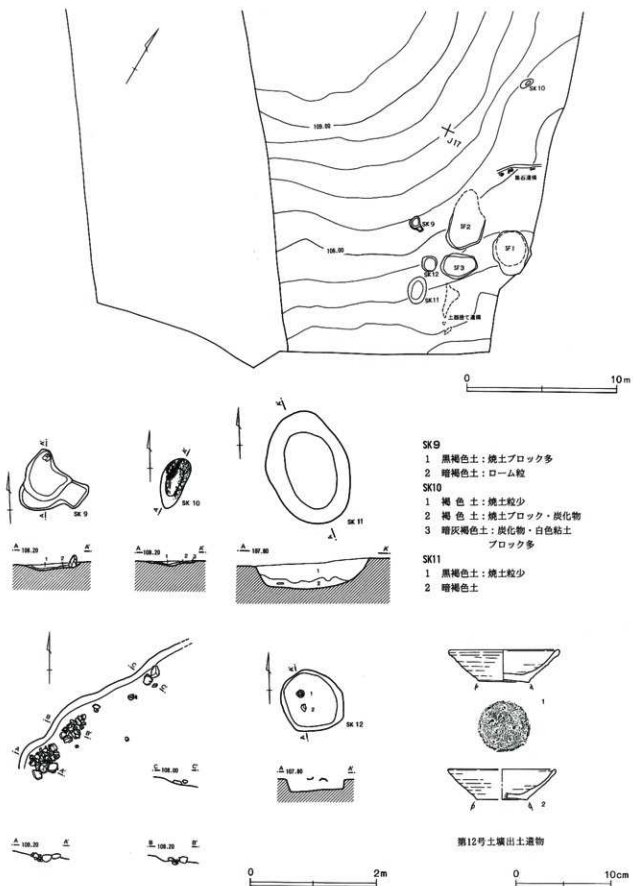
半還元状態の浄瓶21・杯5・9を除き、全て酸化状態である。いずれも全体或いは部分にロクロ成形痕が観察される。

1~9は杯である。ほぼ直線的に開く逆円錐台形の器形で、体部がやや膨らむもの、口縁が僅かに外反するものも存在する。口径10.4~11.4cm、底径4.8~5.6cm、器高2.4~3.1cmで、底径/口径は0.44~0.51である。底部は回転糸切り離し後未調整である。いずれも内面はナデ調整されるが、4~8のように外面にもナデ調整が施される例も存在する。

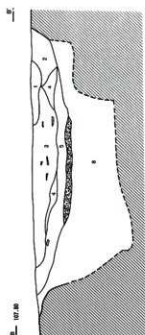
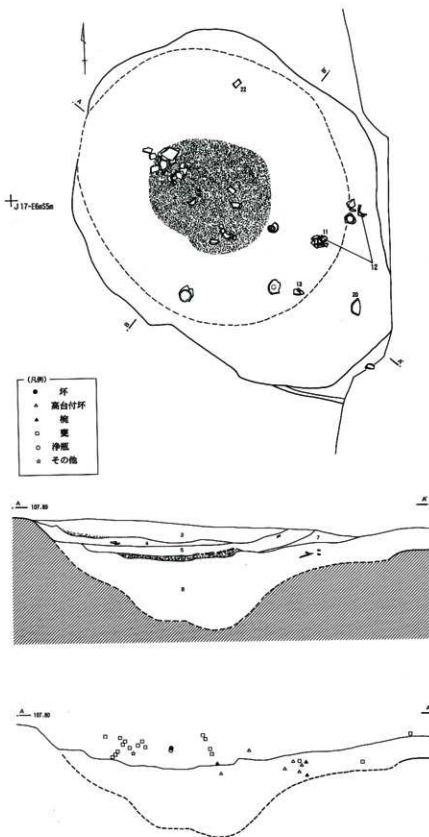
10も杯であるが、小ぶりて器壁厚く、底面や体部下端を手持ち篋削りするなど、他の杯と異質である。

11は高台付杯である。体部は直線的に開く逆円錐台

第106図 土器焼成関連遺構群



第107図 第1号土器焼成遺構

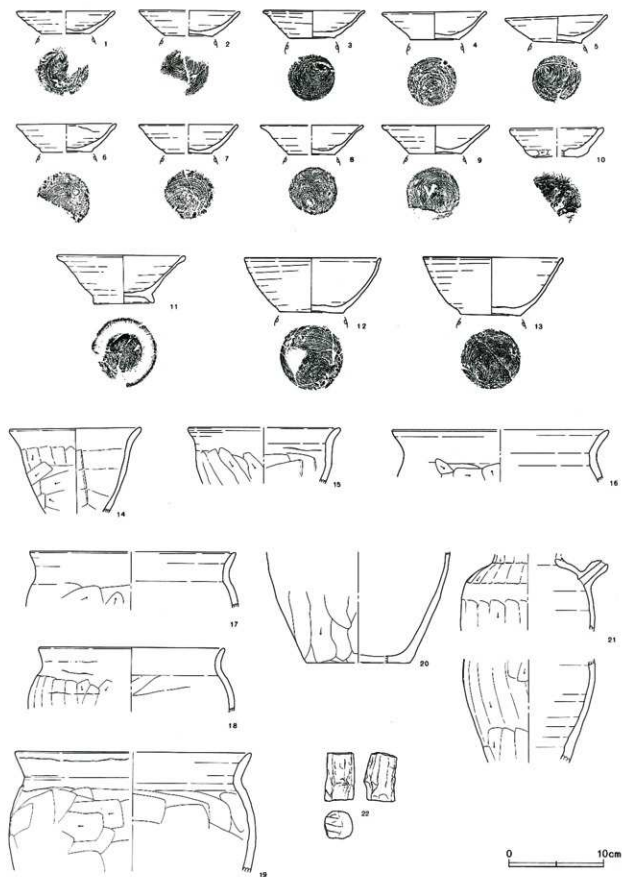


第1号土器焼成遺構 (SF1)

- 1 暗褐色土：白色粘土粒（探掘坑か）
- 2 褐色土：（探掘坑か）
- 3 暗褐色土：下部に焼土粒・炭化粒
- 4 暗褐色土：焼土等を含まず
- 5 黒褐色土：炭化粒多
- 6 赤褐色土：固く焼けている
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土：炭化粒・焼土粒少



第108图 第I号土器烧成遺構出土遺物



第10表 第1号土器焼成遺構出土土物観察表

号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	付着物	備考
1	坏	(10.4)	2.4	5.2	W礫 WGB 鉄 石英	C	にぶい褐色	40		
2	坏	(10.8)	2.6	5.1	WGB 鉄	C	にぶい黄褐色	25		内外面ナデ調整
3	坏	10.8	2.9	4.8	WGB 鉄	D	にぶい黄褐色	80		
4	坏	11.0	2.9	5.2	WGB 鉄	C	にぶい黄色	75		内外面ナデ調整
5	坏	10.9	3.1	5.1	WGR 礫 WG	C	灰白色	80		内外面ナデ調整、半還元状態
6	坏	(10.6)	3.0	5.4	W礫 WG 鉄	C	黄褐色	45		内外面ナデ調整、内面巻き上げ状痕
7	坏	(10.5)	3.0	5.0	GR礫 WGB 鉄	C	褐灰色	45		内外面ナデ調整
8	坏	(11.0)	3.1	5.0	WGB礫 WGB 鉄	C	赤褐色	65		内外面ナデ調整
9	坏	(11.4)	3.0	5.6	WGB礫 WGB 鉄	C	灰黄色	40		半還元状態
10	坏	(10.0)	3.1	4.3	G礫 GB	C	灰オリーブ色	35		内外面ナデ調整、底部・体部下端箇所
11	高台付坏	13.6	5.2	6.4	W礫 WGB 鉄	D	にぶい褐色	75		内面重ね焼き痕
12	碗	14.5	5.7	6.9	WRG礫 WRG	C	明赤褐色	50		内外面ナデ調整
13	碗	14.9	6.1	6.4	鉄 石英 WRG礫 WRG	C	明赤褐色	75		内外面ナデ調整
14	甕	(14.0)			鉄 石英 G礫 WGB 鉄	C	黄褐色	口縁部破片		
15	甕	(16.2)			G 鉄	C	にぶい黄褐色	口縁部15		
16	甕	(23.0)			WB 鉄	C	にぶい黄褐色	口縁部20		
17	甕	(21.9)			WGB 鉄	C	にぶい黄褐色	口縁部15		
18	甕	(19.8)			WG礫 WG	C	黄褐色	口縁部破片		
19	甕	(25.0)			RGW礫 RGW 鉄	C	にぶい黄褐色	口縁部30		口縁外面炭化物若干
20	甕	(11.0)			GBYR礫 鉄	C	明赤褐色	底部15		
21	淨瓶				WGB礫 WGB	C	灰白色	30		半還元状態、注口内径約6mm
22	土製品?				GB礫 WGB 鉄	C	明黄褐色	100		直径2.8cm、長さ4.8cm、一端に木葉痕

形の器形で、底部回転糸切り離し後に高台を貼付する。
内面及び外面下半にはナデ調整が施される。

12・13は碗である。体部はやや膨らみをもって開く。
底部は回転糸切り離し後未調整である。内外面にナデ調整が施される。

14～20は甕である。体部外面に篋削りが施されるが、器壁は全体的に厚いのが特徴である。粘土帯接合痕を残すものもある。20の底面には篋削りが施される。

21は粗製ながら注口部を持つため、淨瓶と考えた。
ロクロ成形の後、外面及び注口部は篋削りて整形される。灰白色であり、半還元状態である。

22は円柱形の粘土塊で、一端は篋による切り離し、もう一端には木葉痕が観察される。

第2号土器焼成遺構 (第109図)

J17グリッドに位置する。東側約1mに第1号土器焼成遺構、南側約30cmに第3号土器焼成遺構が隣接する。遺構は、粘土採掘坑土を掘り込んでいた。北半部では、新田の粘土採掘坑との切り合いて、遺構の状況は不明瞭であった。

平面形は不整形円形、掘り込みの断面形は鍋底状である。規模は長径推定4m、短径2.30m、深さ0.28～0.40mである。主軸はN-19°-Wを指し、谷部等高線に交差する。底面はほぼ水平で、山側の壁がやや高い。

焚口・煙道の特別な施設は見られず、前庭部・焼成部・焼成部の区別も明瞭ではない。天井等上部構造については、ローム主体の第3層が注目されたが、土器を含み、被熱痕も見られなかった。

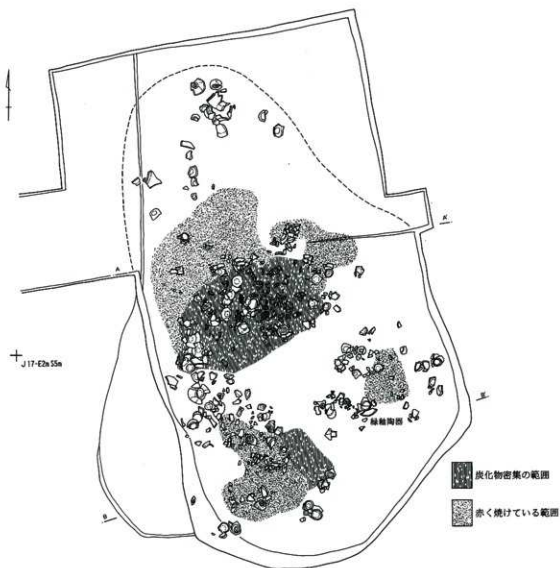
被熱痕跡は、底面中央部の大小3カ所の不定形の範囲で見られた。炭化物が特に集中する範囲も、ほぼこれに一致する。北半部で一部被熱痕が壁下部に及んでいた他は、底面周囲及び壁では不明瞭であった。タール等の付着も観察されなかった。

覆土第1層には、焼土・炭化物が集中する。第4層は灰層、第4層下の底面には被熱痕跡が明瞭であった。遺構の時期は、10世紀前半と考える。

出土遺物 (第112～115図)

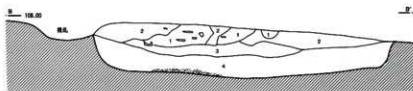
緑釉陶器皿76及び若干の半還元状態のものを除き、全て酸化状態である。いずれも全体或いは部分にロクロ成形痕が観察される。

第109図 第2号土器焼成遺構



第2号土器焼成遺構 (SF2)

- 1 暗赤褐色土：焼土・炭化物・遺物
- 2 暗褐色土：焼土粒少 しまりなし
- 3 暗黄褐色土：ローム土主体（埋戻しか）
- 4 黒褐色土：炭化物・焼土粒多
- 5 暗褐色土：黄灰色粘土斑状（採掘坑か）
- 6 暗黄褐色土：ローム土主体（採掘坑か）
- 7 黄灰色粘土：（採掘坑か）

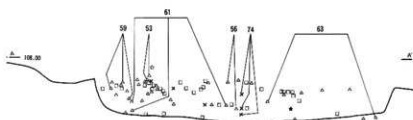
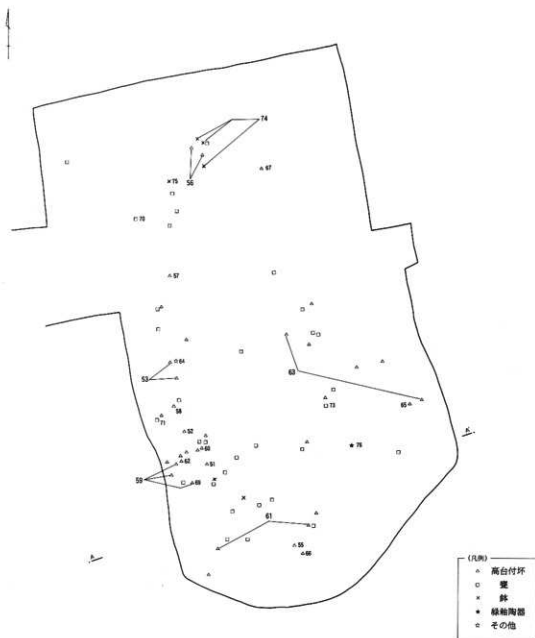


0 1m

第110图 第2号土器烧成遺標遺物出土状況(1)

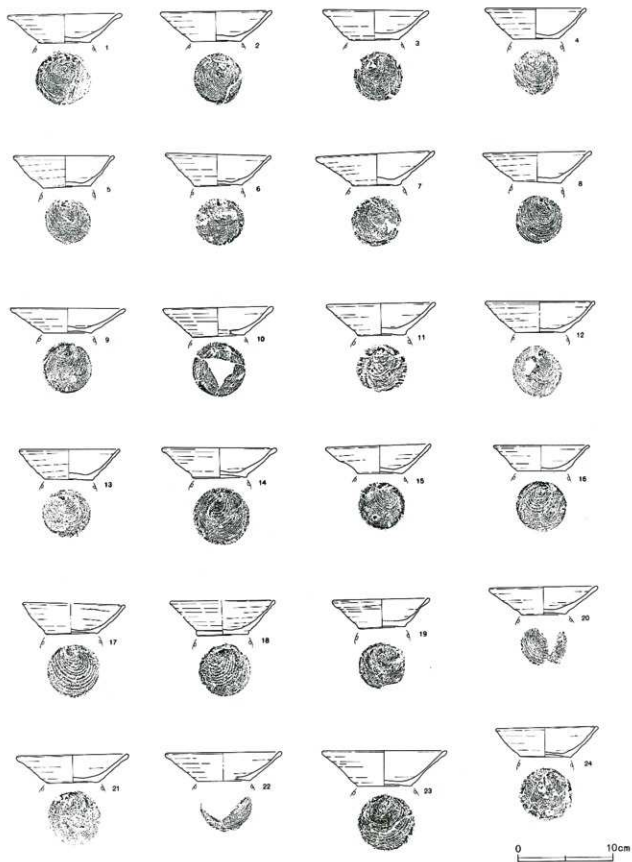


第111図 第2号土器焼成遺構遺物出土状況(2)



0 1m

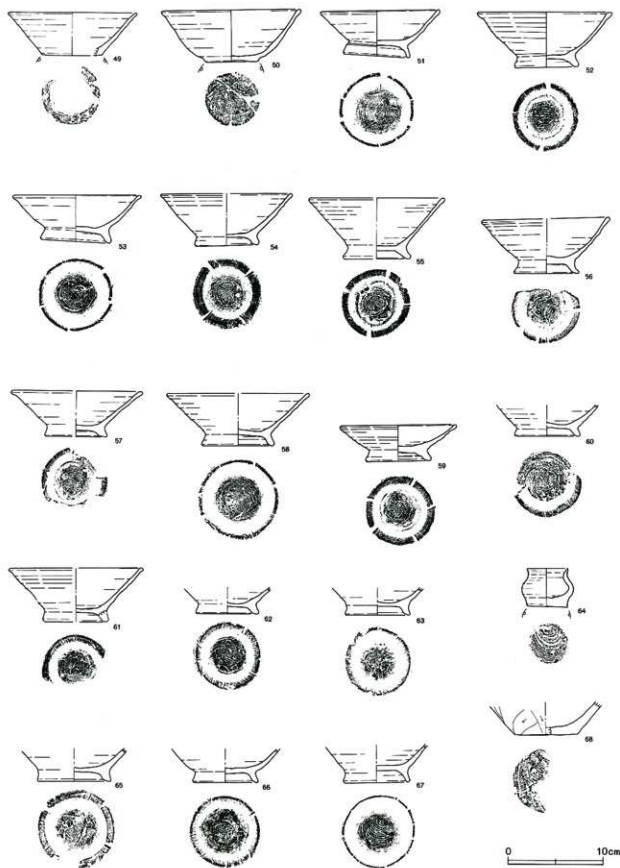
第112図 第2号土器焼成遺構出土遺物(1)



第113图 第2号土器烧成遺構出土遺物(2)



第114図 第2号土器焼成遺構出土遺物(3)



1～49は坏である。ほぼ直線的に開く逆円錐台形の器形で、体部がやや膨らむもの、口縁が僅かに外反するものもある。大形の坏である23・46～49を除くと、口径10.2～12.6cm、底径4.6～5.8cm、器高2.6～3.7cmで、底径/口径は0.41～0.55である。大形の坏(23・46～49)は、口径12.4～14.0cm、底径5.6～6.4cm、器高3.7～4.5cmで、底径/口径は0.40～0.46である。底部は回転糸切り離した後未調整である。18・29は体部下端が未調整で底部が円盤状に剥離しかけており、いわゆる「円柱造り」との関連を思わせる。いずれの坏も内面はナデ調整されるが、14・17・24・26・32・43・45のように外面にもナデ調整が施される例も存在する。

50は椀である。体部はやや膨らみをもって開く。底部は回転糸切り離した後未調整である。内面及び外面下半にナデ調整が施される。

51～63・65～67は高台付坏である。僅かに膨らむものもあるが、ほぼ直線的に開く逆円錐台形の体部を持つ。口径は12.5～15.1cmである。59は体部が浅く、高

台付皿に近い。いずれも底部回転糸切り離した後高台を貼付する。内面にはナデ調整が施されるが、52・59を除いて、外面下半にもナデ調整が施される。69は、いわゆる足高高台か。

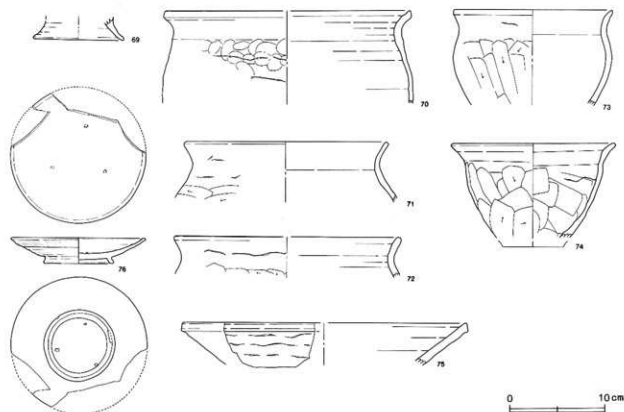
64の小形壺の底部も回転糸切り離した後未調整である。

68・70～74は甕である。体部外面に篋削りが施されるが、器壁は全体的に厚いのが特徴である。外面に粘土帯接合痕を残すものが多い。68の底部は回転糸切り離した後周辺静止篋削りを施す。70は、他の甕が口唇を丸く収めるのに対して、口縁外面に稜をもって立ち上がる垂直な面を作る。外面の粘土帯接合痕部分には指押さえ痕が見られる。73の口縁部がやや近似する。

75は鉢である。外面に粘土帯接合痕を顕著に残す。

76は緑釉陶器皿である。遺構のはば底面に伏せた状態で置かれていた。遺構底面被熱部にかかっていた部分は、二次的な被熱で釉が変色している。表裏に三叉トチンの痕跡が観察される。黒笹90窯式～折戸53窯式に相当するものと思われる。

第115図 第2号土器焼成遺構出土遺物(4)



第11表 第2号土器焼成遺構出土遺物観察表(1)

号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色調	残存率	付着物	備考
1	坏	(12.2)	3.0	5.6	WR礫 W 鉄	C にぶい橙色	50		内外面ナデ調整
2	坏	(11.8)	3.1	5.2	GR礫 WGB 鉄	C にぶい橙色	55		内外面ナデ調整
3	坏	11.3	3.3	5.2	WG礫 WGB 鉄	C 浅黄色	95		
4	坏	10.7	3.2	4.9	GB礫 GB鉄 石英	C 浅黄色	80		
5	坏	10.6	3.3	5.0	WGBR 鉄 石英	C にぶい黄褐色	80		内面重ね焼き痕、内面巻き上げ状態
6	坏	11.1	3.6	5.0	GRW礫 GRW 鉄	C にぶい黄褐色	80		
7	坏	12.6	3.6	5.2	W礫 WGB 鉄	C にぶい赤褐色	80		
8	坏	11.2	3.2	5.0	WGR礫 鉄 石英	C 橙色	85		内面重ね焼き痕
9	坏	(12.2)	2.6	5.2	WR礫 WGB	C 橙色	40		
10	坏	11.7	3.0	5.6	WBR礫 WBR	C にぶい黄褐色	80		
11	坏	(11.6)	3.4	5.3	GR礫 WGB 鉄	D 黄褐色	40		
12	坏	11.1	3.4	5.4	BG礫 GBW 鉄	C にぶい黄褐色	98		焼け歪み
13	坏	10.7	3.2	5.2	GW礫 GWB 鉄	D 浅黄色	90		
14	坏	12.2	3.2	5.8	BWG礫 BWG 鉄	C にぶい黄褐色	77		内外面ナデ調整、内面重ね焼き痕
15	坏	11.2	3.1	4.8	WG礫 WGB 鉄	C 浅黄色	85		
16	坏	(10.2)	2.7	5.2	BG礫 WGB 鉄	C にぶい黄褐色	60		
17	坏	(10.9)	(3.3)	5.5	W礫 RBWG	C にぶい黄褐色	55		内外面ナデ調整、内面巻き上げ状態
18	坏	(11.1)	(3.8)	5.5	WG礫 WG鉄	C 浅黄色	50		円柱造り痕跡? 内面巻き上げ状態
					軽石				
19	坏	10.2	3.0	4.9	WGB礫 鉄 石英	C 明黄褐色	85		
20	坏	(11.6)	2.9	5.0	W礫 WGB 鉄	C 明赤褐色	45		内面重ね焼き痕
21	坏	(12.0)	2.9	5.8	WG礫 WGB 鉄	C 灰白色	50		半還元状態
22	坏	(12.4)	3.0	5.5	G礫 WBG 鉄	C にぶい黄褐色	35		
23	坏	(13.4)	3.7	5.8	G礫 WBG 鉄	C 灰白色	75		半還元状態
24	坏	10.8	3.3	5.3	WGB礫 WGB 鉄	B 明赤褐色	70		内外面ナデ調整
25	坏	(11.4)	3.7	5.2	WR礫 WG	B オリーブ黒色	25		
26	坏	(10.7)	3.2	4.6	WG礫 WG 鉄	B 明赤褐色	35		内外面ナデ調整
27	坏	11.3	3.1	5.4	WG礫 WB	C にぶい黄褐色	75		内面重ね焼き痕
28	坏	(12.4)	3.3	5.6	G礫 GWB 鉄	B 橙色	20		
					石英				
29	坏	12.2	3.6	5.1	GW礫 GW	C 明赤褐色	98		円柱造り痕跡? 内面巻き上げ状態
30	坏	(12.2)	3.1	(5.8)	G礫 GWB	C にぶい黄褐色	25		
31	坏	12.2	3.4	5.0	G礫 WB	C オリーブ	35		
32	坏	(11.2)	3.1	5.0	WG礫 WGB 鉄	D 浅黄褐色	50		内外面ナデ調整
33	坏	11.6	3.2	5.3	GWB礫 GWB	C 明赤褐色	85		
					鉄 石英				
34	坏	(10.4)	3.2	5.2	WG礫 WGB 鉄	C 橙色	30		
35	坏	(11.9)	(3.2)	5.2	WBG礫 WBG	C 橙色	50		
36	坏	12.0	3.2	5.1	GW礫 GW鉄	C にぶい黄褐色	75		
37	坏	(12.6)	3.2	5.6	WR礫 WB 鉄	C にぶい橙色	45		
38	坏	10.6	3.0	5.8	GB礫 WGB 鉄	C 灰黄色	80		
39	坏	(11.0)	3.2	5.1	WG礫 WG 鉄	C にぶい黄褐色	80		
40	坏	11.0	3.4	4.8	GR礫 WGB 鉄	C 浅黄色	75		
41	坏	12.4	3.5	5.8	BG礫 WBG	C 灰白色	45		半還元状態
42	坏	11.0	3.0	5.8	G礫 WG 鉄	C にぶい黄色	75		
43	坏	(10.6)	3.2	5.3	WGR礫 WG 鉄	C 灰黄色	30		内外面ナデ調整
44	坏	(10.8)	3.1	5.8	BG礫 WGB 鉄	C 浅黄色	30		
45	坏	(10.8)	3.0	4.8	WR礫 WGB 鉄	C にぶい黄褐色	30		内外面ナデ調整
46	坏	(12.4)	4.0	5.6	GB礫 WGB 鉄	C 浅黄褐色	45		
47	坏	(14.0)	3.8	5.6	WG礫 WGB 鉄	B 橙色	25		
48	坏	(13.2)	3.9	5.8	WG礫 WGB 鉄	B 橙色	30		
49	坏	(13.8)	4.5	6.4	WG礫 WGB 鉄	C 浅黄色	30		
50	碗	(15.0)	5.5	5.8	G礫 GB	C にぶい黄色	20		
51	高台付坏	12.7	4.8	6.8	WG礫 WGB	C にぶい黄色	55		内面重ね焼き痕、半還元状態
52	高台付坏	14.2	5.8	6.6	RWG礫 WG	C 明赤褐色	75		内面重ね焼き痕
53	高台付坏	13.6	5.0	7.3	WGB礫 WGB 鉄	D 浅黄色	75		

第12表 第2号土器焼成遺構出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	装飾	色調	残存率	付着物	備考
54	高台付杯	(14.1)	5.5	6.6	WG礫 WGB 軽石	C	にぶい黄褐色	40		半還元状態
55	高台付杯	(14.4)	6.4	7.2	G礫 WG 鉄	D	橙色	15		
56	高台付杯	(13.6)	5.9	6.7	W礫 WG	C	浅黄色	40		内面重ね焼き痕、半還元状態
57	高台付杯	(14.0)	4.8	6.6	W礫 WBG	C	にぶい黄褐色	30		
58	高台付杯	(15.1)	5.5	7.6	RWGB礫 RWGB	C	橙色	30		
59	高台付杯	12.5	3.8	6.8	WGRB礫 WGRB 鉄	C	にぶい黄褐色	70		内面重ね焼き痕
60	高台付杯			(7.0)	R礫 WG 鉄	C	にぶい黄褐色	底部95		
61	高台付杯	(14.3)	(5.7)	(6.6)	WG礫 WG 鉄	C	にぶい黄褐色	30		
62	高台付杯			6.8	W礫 WG	C	明赤褐色	底部100		内面巻き上げ状底
63	高台付杯			6.9	WG礫 WG 鉄	D	浅黄色	底部100		内面重ね焼き痕
64	小型壺	4.3	4.0	4.3	R礫 鉄	C	にぶい黄褐色	98		
65	高台付杯			7.8	G礫 WG 鉄	D	にぶい黄褐色	底部95		
66	高台付杯			7.0	WG礫 WG	D	にぶい黄褐色	底部95		
67	高台付杯			7.1	GR礫 WG 鉄	C	にぶい黄褐色	底部100		
68	甕			(6.6)	GR礫 鉄	D	にぶい黄褐色	底部50		
69	高台付杯?			9.5	WG礫 GW 鉄	C	浅黄褐色	底部100		足高台?
70	甕	(26.1)			RBW 鉄	D	明黄褐色	口縁部25		
71	甕	(21.2)			GR礫 GB鉄	C	にぶい黄褐色	口縁部破片		
72	甕	(24.0)			WGR礫 鉄 石英	C	にぶい黄褐色	口縁部15	内面スス	
73	甕	(16.8)			GW礫 GW 鉄	C	褐色	口縁部破片		半還元状態
74	甕	17.5			WGRB礫 鉄	D	浅黄色	85		
75	鉢	(30.0)			WG礫 WG 鉄	D	浅黄褐色	口縁部破片		
76	縁飾器皿	14.2	2.7	7.3	W微細粒 緻密	B	灰黄色	65	全面厚く釉かける	底部・内面に三叉トチン痕、二次被熱痕

第3号土器焼成遺構 (第116図)

J17グリッドに位置する。北側約30cmに第2号土器焼成遺構、東側約1mに第1号土器焼成遺構、南側約50cmに土器捨て遺構、西側約30cmに第12号土壇が隣接する。遺構は、粘土探掘坑覆土を掘り込んでいた。

平面形は楕円形、掘り込みの断面形は鍋底状であった。規模は長径2.44m、短径1.62m、深さ0.10～0.20mである。主軸はW-38°-Sを指し、谷部等高線に平行する。底面はほぼ水平で、山側の壁がやや高い。

焚口・煙道の特別な施設は見られず、前庭部・燃焼部・焼成部の区別も明瞭ではない。天井等上部構造については、灰白色粘土ブロックを多く混じる第3層が注目されたが、土器を含み、被熱痕も見られなかった。

被熱痕跡は、底面・壁等いずれにおいても不明瞭であった。タール等の付着も観察されなかった。

覆土第2層は灰層と思われる。坏は、全て第2層下から出土している。

遺構の時期は、10世紀前半と考える。

出土遺物 (第117図)

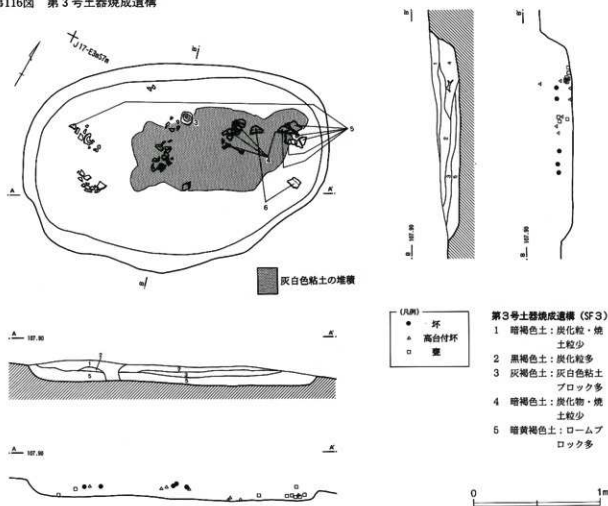
出土した土器は、全て酸化状態である。いずれも全体或いは部分にロクロ成形痕が観察される。

1・2は坏である。ほぼ直線的に開く逆円錐台形の器形を持つ。底部は回転糸切り離し後未調整である。内面はナデ調整される。

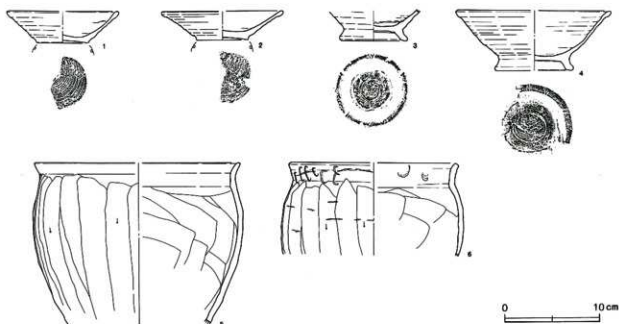
3・4は高台付坏である。いずれも底部回転糸切り離し後に高台を貼付する。4は比較的大型で、体部下半に微かに屈曲を持つ。底面を含む表裏全面に炭化物が厚く沈着している。

5・6は甕である。体部外面に篋割りが施されるが、器壁は全体的に厚いのが特徴である。6は外面に粘土帯接合痕を残し、口縁には指押さえ痕が見られる。

第116図 第3号土器焼成遺構



第117図 第3号土器焼成遺構出土遺物



第13表 第3号土器焼成遺構出土遺物観察表

号	器種	口径	器高	底径	胎土	施装	色調	残存率	付着物	備考
1	坏	(11.9)	(3.4)	(5.5)	WBG 鉄	C	にぶい 橙色	25		
2	坏	(13.0)	(3.0)	(5.5)	BG 鉄	C	にぶい 赤褐色	20		内面巻き上げ状底
3	高台付坏			7.1	WG 礫	C	にぶい 黄褐色	底部100		焼け歪み
4	高台付坏	(16.4)	(6.4)	(8.2)	WGB 礫 WGB 鉄	C	にぶい 黄褐色	50	表裏に炭化物厚く沈着	内面重ね焼き痕
5	甕	21.9			GW 礫 GW 鉄	C	明褐色	25		
6	甕	17.4			WGB 礫 WGB 鉄	C	橙色	口縁部50		

土器捨て遺構 (第118図)

J 17・18グリッドに位置する。第3号土器焼成遺構の南側約50cm付近から、谷に向かって延びる。

土器捨て遺構は、粘土探掘坑覆土上面において、土器の平面的な分布として検出され、人為的な掘り込み・被熱痕跡・焼土・炭化物等は見られなかった。

土器の平面分布は、南北約5m、東西約2.5mで、谷部等高線に直交して南北に細長い。北側の南北約1.8m、東西約0.8mの範囲では特に土器の密集度が高かった。垂直分布では、第1層から第3層上部の厚さ20cm内外に集中する。土器の残存率は比較的高いが、出土状況は正位・逆位・横位と一律でなく、意識的に並べたり、置き重ねた様子は見られなかった。また、器種による分布の偏りも見られなかった。

以上から、本遺構については、谷の斜面及び埋没しかけた粘土探掘坑の窪みを利用して、谷の上部から土器を投棄したものとする。土器焼成遺構との位置関係及び出土土器群の近縁性を考え合わせると、一連の土器生産過程の中でこれらと密接な関連をもっていた可能性が高いと思われる。

遺構の時期は、10世紀前半と考える。

出土遺物 (第121～123図)

半還元状態の坏21・36を除き、全て酸化状態である。いずれも全体或いは部分にロクロ成形成が観察される。

1～38は坏である。ほぼ直線的に開く逆円錐台形の器形で、体部がやや膨らむものもある。口径10.8～12.7cm、底径5.0～6.1cm、器高2.8～3.5cmで、底径/口径は0.41～0.52である。底部は回転系切り離し後未調整である。いずれの坏も内面はナデ調整されるが、

外面にナデ調整が施される例は少ない。

39～61は高台付坏である。僅かに膨らむものもあるが、ほぼ直線的に開く逆円錐台形の体部を持つ。口径は12.2～15.5cmで、60のみ口径16.5cmと大型である。いずれも底部回転系切り離し後に高台を貼付する。内面にはナデ調整が施されるが、39・44・49・51・52・55・57・58・60は外面下半にもナデ調整が施される。

62は小形碗である。口縁内面には粘土帯接合痕を残し、指で押さえる。外面及び底面には篋削りを施す。

63は鉢である。ほぼ直線的に開く逆円錐台形の器形で、口縁端部を木口状工具で強くナデで端面を作る。器壁は全体的に厚い。体部外面上半には粘土帯接合痕を顕著に残し、下半には篋削りを施す。内面はナデ調整。底部は回転系切り離し後未調整である。

64・65は甕か。64は外面篋削りが施されるが、器壁は厚い。65の底部は回転系切り離し後未調整である。

土壌・集石遺構

第1～3号土器焼成遺構及び土器捨て遺構の存在するJ 17・18グリッド周辺では、他に土壌4基と集石遺構1カ所が検出された。これらは被熱痕跡・焼土・炭化物・酸化窑焼成土器など、土器焼成遺構との関連を窺わせる要素を含むことから、特にここで記述する。

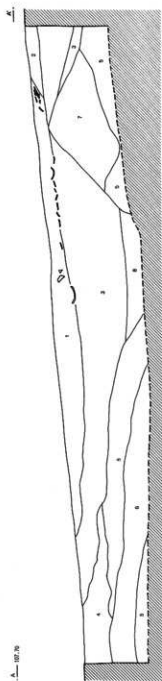
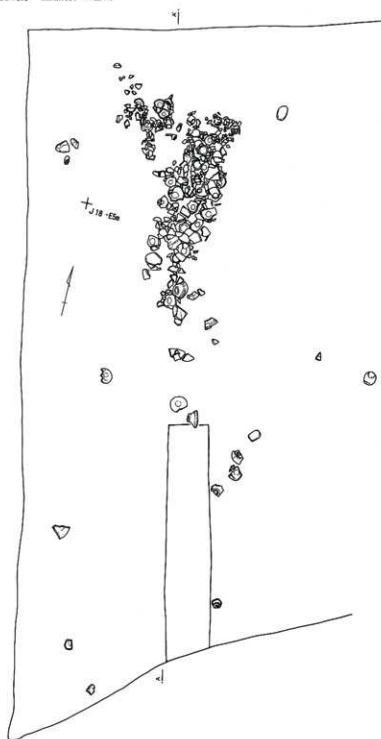
第9号土壌 (第106図)

J 17グリッドに位置する。東側約1.5mには第2号土器焼成遺構が存在する。

平面形は、一辺約1mの三角形に近く、深さは9cm前後であった。掘り込みの断面形は皿状である。

北側頂点部には自然礫が立てられ、礫表面には被熱痕が見られた。また、覆土第1層は炭化物を多く含み、

第118図 土器捨て遺構

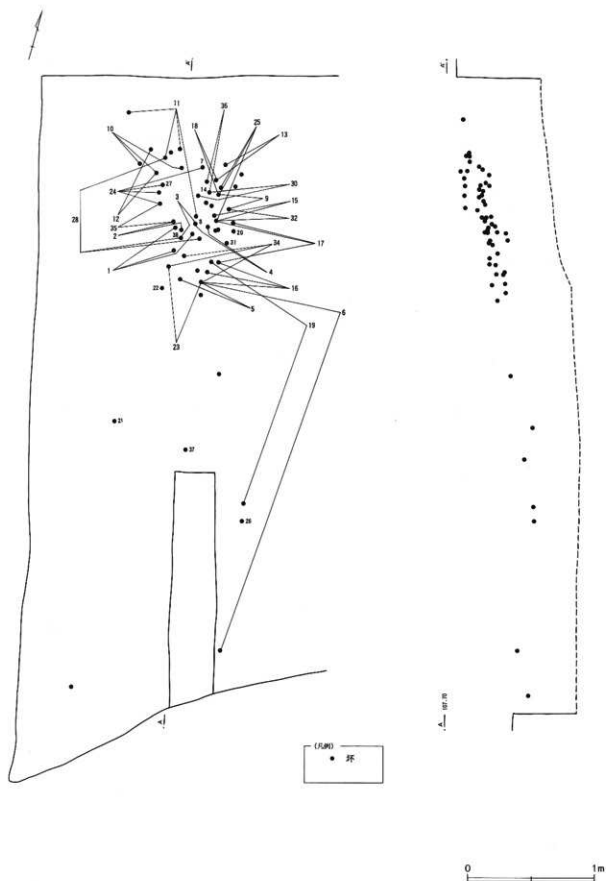


土器捨て遺構 (SX4)

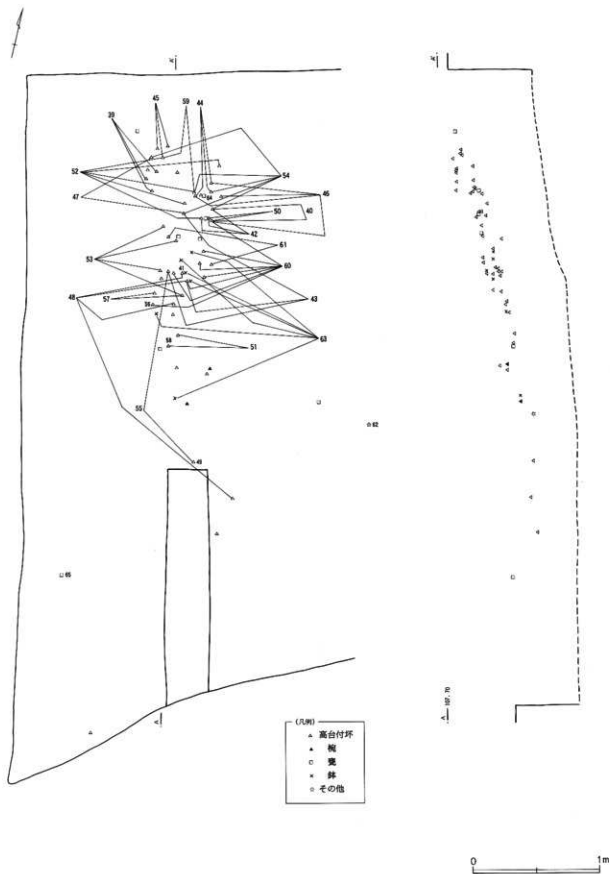
- 1 暗褐色土：白色粘土小ブロック
- 2 褐色土：白色粘土ブロック
- 3 暗褐色土：白色粘土ブロック多
- 4 褐色土：白色粘土ブロック少
- 5 黒褐色土
- 6 暗褐色土：白色粘土ブロック多
- 7 暗褐色土：白色粘土ブロック微
- 8 褐色土：黄褐色土ブロック多 白色粘土ブロック微

0 1m

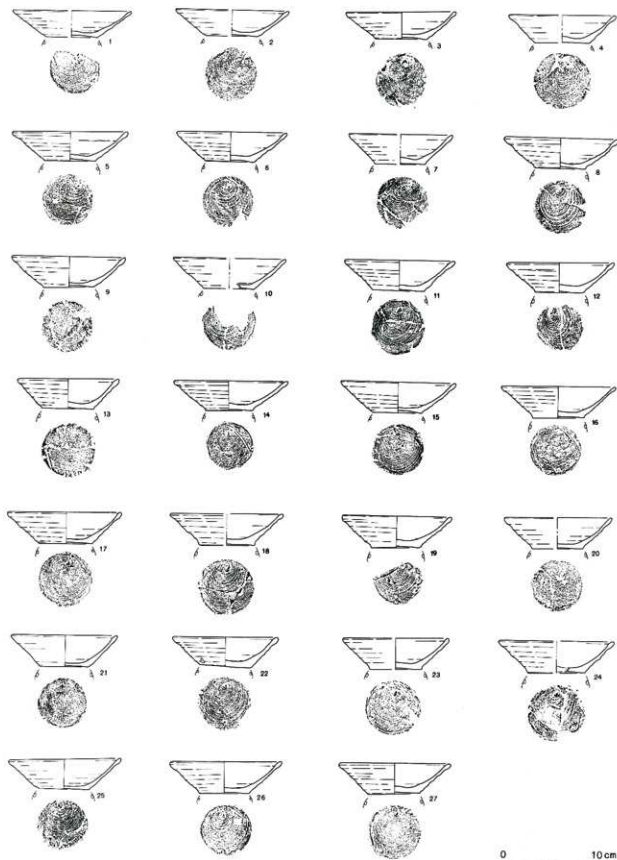
第119図 土器捨て遺構遺物出土状況(Ⅰ)



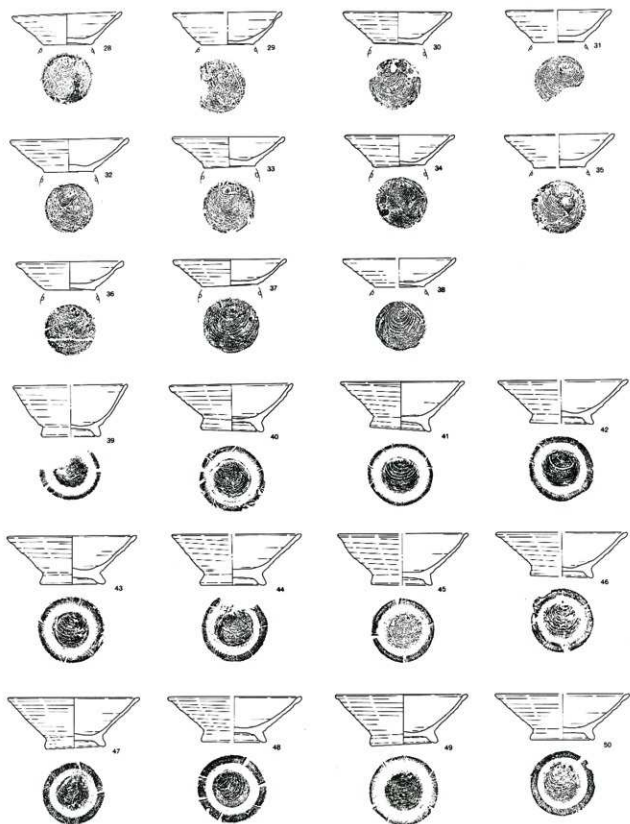
第120図 土器捨て遺構遺物出土状況(2)



第121図 土器捨て遺構出土遺物(1)

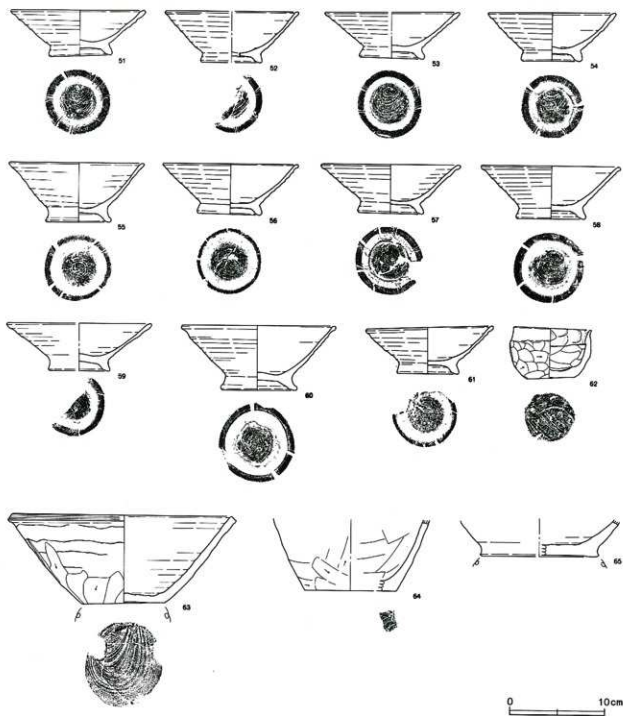


第122図 土器捨て遺構出土遺物(2)



0 10cm

第123図 土器捨て遺構出土遺物(3)



第14表 土器捨て遺構出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色	残存率	付着物	備考
1	坏	(12.6)	2.8	5.4	W礫 WG	B 明赤褐色	50		
2	坏	(12.0)	2.8	5.6	WG礫 GB 鉄 石英	D にぶい黄褐色	50		
3	坏	11.7	2.9	5.5	WG礫 WGB 鉄	D 黄褐色	80		
4	坏	(11.4)	2.9	5.9	WG礫 WGB 鉄	C 明黄褐色	35		
5	坏	12.3	3.1	5.6	WG礫 WGB	C 明赤褐色	70		
6	坏	11.7	3.1	5.4	WG礫 WG	C 褐色	75		内面巻き上げ状痕
7	坏	(11.0)	3.1	5.5	WGR礫 WGB 鉄	C 明赤褐色	45		
8	坏	12.1	3.2	5.3	WR礫 WR	C 明赤褐色	90		口縁の一部にゆがみ
9	坏	12.0	3.2	5.4	WG礫 鉄 石英	C 赤褐色	70		
10	坏	(12.0)	3.2	5.5	GR礫 WG 鉄	B 明赤褐色	45		
11	坏	11.7	3.2	5.6	WG礫 鉄 石英	D にぶい黄褐色	80		内面重ね焼き痕
12	坏	11.2	3.2	5.3	GW礫	C にぶい黄褐色	78		内面重ね焼き痕
13	坏	10.8	3.2	5.6	WGR礫 WGR 鉄 石英	E 褐色	50		
14	坏	12.2	3.3	5.1	WGR礫 WGB	D にぶい黄褐色	75		
15	坏	12.2	3.3	5.3	GWRB礫 GWRB	C 褐色	80		内面重ね焼き痕
16	坏	12.1	3.3	5.4	WG礫 鉄 石英	C にぶい黄褐色	55		
17	坏	12.1	3.3	5.6	WGR礫 WGR	C 褐色	55		
18	坏	(12.1)	(3.3)	(6.0)	BGWR礫 BGWR	C 褐色	50		
19	坏	11.6	3.3	5.1	GWR礫 鉄 石英	C 明赤褐色	70		
20	坏	(11.4)	3.3	5.4	W礫 WBG 鉄	C 明赤褐色	40		内外面ナゲ調整
21	坏	11.3	3.3	5.2	GW 石英	D 浅黄色	85	内面スス	内外面ナゲ調整? 半還元状態
22	坏	11.2	3.3	5.4	GW礫 Wくさ ね礫 WGB	D 褐色	70	外面粘土粒	
23	坏	(11.2)	3.3	5.6	WG礫 WBG 鉄	C 明赤褐色	35		
24	坏	(12.3)	(3.4)	6.1	WG礫 WG 鉄	D 褐色	60		
25	坏	11.9	3.4	5.4	WG礫 WG 鉄	C 褐色	65		
26	坏	11.9	3.4	5.4	WGB礫 WGB	D にぶい褐色	65		
27	坏	11.9	3.4	5.5	WGB礫 WGB 鉄 石英	D にぶい黄褐色	75		
28	坏	11.8	3.4	5.0	WG礫 WBG 鉄	C 明赤褐色	90		
29	坏	(11.7)	3.4	5.7	WR礫 WG 鉄	C 褐色	55		
30	坏	11.6	3.4	5.3	WRG礫 WRG	C 赤褐色	90		内面重ね焼き痕
31	坏	(11.2)	3.4	5.4	WR礫 WGB 鉄	B 明赤褐色	45		
32	坏	12.7	3.5	5.2	GW礫 鉄	D 褐色	73		
33	坏	12.0	3.5	5.5	BGW礫 BGW 鉄	D にぶい黄褐色	80		
34	坏	11.7	3.5	5.3	WBR礫 WBR 鉄	C 赤褐色	75		
35	坏	(11.6)	3.5	5.5	WG礫 WG 鉄	C 明赤褐色	30		
36	坏	11.1	5.3	3.0	WG礫	D 浅黄色	75		内外面ナゲ調整? 半還元状態
37	坏	12.1	3.0	6.0	GB礫 GB	C 明褐色	77		
38	坏	(12.0)	3.0	5.3	WBG礫 WB 鉄 石英	C 明黄褐色	65		
39	高台付坏	(12.2)	(5.5)	(6.0)	WGB礫 WGB 鉄	D にぶい黄褐色	30		
40	高台付坏	13.2	5.1	6.1	WG礫 WGB 粘	D にぶい黄褐色	75		
41	高台付坏	13.2	5.1	6.4	WGB礫 WGB 粘	C 明赤褐色	80		
42	高台付坏	(13.7)	(4.6)	(6.6)	RWG礫 RWG	C 明赤褐色	50		
43	高台付坏	13.7	5.1	6.8	GW礫 GW 鉄	C 褐色	80		
44	高台付坏	(13.8)	5.4	7.0	WG礫 WG	C 明赤褐色	48		
45	高台付坏	(13.8)	(5.5)	(6.3)	RGW礫 RGW 鉄	C 明赤褐色	50		
46	高台付坏	(13.9)	(4.7)	(6.5)	WBGR礫 WBGR	C 赤褐色	50		
47	高台付坏	13.9	5.5	6.4	GWB礫 GWB 鉄	D 褐色	55		
48	高台付坏	(14.1)	4.8	6.6	WGB礫 WGB 鉄	C 明赤褐色	55		
49	高台付坏	14.1	5.5	7.0	WG礫 WGB	C にぶい黄褐色	80		
50	高台付坏	(14.2)	(4.9)	6.7	RG礫 WRG	C 明赤褐色	35		
51	高台付坏	14.2	5.1	6.5	GW礫 WBG 粘	D にぶい黄褐色	70		
52	高台付坏	(14.2)	(5.4)	(6.4)	WG礫 WG	C 明赤褐色	35		内面重ね焼き痕
53	高台付坏	(14.3)	4.9	6.6	GR礫 BWG	C 赤褐色	55		

第15表 土器捨て遺構出土土物観察表(2)

号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色調	残存率	付着物	備考
54	高台付坏	14.4	5.1	6.1	BGW礫 WB	D にぶい黄褐色	85		
55	高台付坏	14.4	6.3	6.7	G礫 WGB 鉄	D 明赤褐色	55		
56	高台付坏	14.5	5.3	6.1	GRW礫 WGB	C にぶい黄褐色	70		
57	高台付坏	14.7	5.2	6.7	GW礫 WGB 鉄	C 橙色	60		
58	高台付坏	14.8	5.6	7.1	GW礫 GBW	C 明褐色	60		
59	高台付坏	(15.5)	5.0	6.5	G礫 WGB 鉄 石英	C 明黄褐色	20		
60	高台付坏	16.5	6.8	8.0	GRB礫 GRB 鉄	B 明赤褐色	80		
61	高台付坏	13.6	5.0	6.5	GBR礫 鉄	C 明黄褐色	80		
62	小形碗	8.2	5.5	5.0	GBW礫 GBW 鉄	C 橙色	95		
63	鉢	23.3	9.3	8.8	WR礫 WR 鉄	B 橙色	75		
64	甕			(9.8)	WRG礫 WB 鉄	C 明黄褐色	底部破片		
65	甕			(12.6)	WG礫 WG 鉄 石英	D 淡黄色	底部55		

焼土ブロックを多量に混じていた。覆土中からは、酸化状態の土器小片が出土している。

他の土器焼成遺構群との関連が推測される。

第10号土塊 (第106図)

J 16グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、規模は長径0.83m、短径0.40m、深さは8cm前後であった。掘り込みの断面形は皿状である。

覆土は焼土ブロック・炭化物を混じる。また、底面～東壁面には被熱痕跡が見られ、底面～西壁面には炭化物の付着が顕著であった。覆土中からは、酸化状態の坏・甕の小片が出土している。

他の土器焼成遺構群との関連が推測される。

第11号土塊 (第106図)

J 18グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.76m、短径1.25m、深さ0.42mであった。

覆土中から酸化状態の土器小片が出土しているが、他の土器焼成遺構群との関連は不明である。

第12号土塊 (第106図)

J 17グリッドに位置する。東側約30cmに第3号土器焼成遺構が隣接する。

平面形は、直径1m前後の不整形円形で、深さは20cm前後であった。掘り込みの断面形は箱状である。

被熱痕跡・焼土ブロック等は検出されなかったが、覆土上部で酸化状態の坏が2点出土した。高台付坏の破片も出土している。

他の土器焼成遺構と関連を持つ遺構と推定される。

出土遺物 (第106図)

1・2とも酸化状態の坏である。1は完形で、ほとんど膨らみを持たずに、口縁部まではほぼ直線的に開く。器壁外面にはクロコ成形成を明瞭に残すが、内面はナデが加えられている。1・2とも底面は、回転糸切り離し後未調整である。

集石遺構 (第106図)

J 16・17グリッドに位置する。南側約2mに第2号土器焼成遺構が存在する。全体として北東～南西に約2.6mの長さを持つ。礫は自然礫で、被熱して赤化した、割れたものが多く含まれる。

粘土探掘坑群の縁辺に位置するため、粘土探掘時に除去した礫の集積とも考えられるが、被熱礫が多いことから、土器焼成と関連する可能性も否定できない。

礫に混じて風化著しい瓦片が出土している。

第16表 第12号土塊出土土物観察表

号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色調	残存率	付着物	備考
1	坏	11.8	3.2	5.2	BW 鉄	C 浅黄橙	100		
2	坏	(11.5)	3.2	(5.4)	BW 鉄	C にぶい黄褐	45		

(3) 粘土採掘坑群

粘土採掘坑群 (第124・125図)

粘土採掘坑群は、調査区南端部の坂東山西遺跡との境界の谷部分で検出された。加治丘陵は、北側の入間川と南側の霞川とに挟まれているが、分水嶺が南に偏っているため、北東方向に向かって入間川に合流する小河川に開析された谷が発達している。粘土採掘坑群が検出された谷も、入間川に注ぐ秋津川の支谷に相当し、東北東方向に開いている。

調査区内では、大小約90基以上の粘土採掘坑が密に切り合った状態で検出された。

粘土採掘坑を個別に観察した結果、粘土採掘坑の形成について次のような過程が考えられた。採掘の目的とされたのは、基本土層の第IV～VI層、特に第V層の良質の白色粘質土であったと推定される。

- ① まず地表から縦穴を掘り、目的とする粘土層の深さに到達すると、粘土の採掘と搬出を開始する。
- ② 良質の粘土層を追って、採掘坑壁面下部からトンネル状に掘り進む。
- ③ 採掘坑壁面がオーバーハングして危険になると、壁面上部を崩して、その廃土を採掘方向の反対側に片づけて、更に採掘と搬出を続ける。
- ④ 過程③が繰り返された結果、白色粘質土ブロックを密に含む土層とそれ以外の土層が互層になって、次第に採掘坑は埋没してゆく。やがて、採掘が困難になって、新たな採掘坑を掘る。

更に、粘土採掘坑群における個々の切り合い関係を検討すると、

谷中央部(南)→谷斜面部(北)

谷中央部(東)→谷頭部(西)

という方向性が見られることがわかった。

斜面部については、山側になるにしたがい良質の粘土層は薄くかつ深くなるためか、標高108.00m前後が粘土採掘坑の分布の北限であった。また、谷頭は西側調査区外に相当し、谷頭に近づくほど粘土採掘坑の分布は稀薄になる。

東側調査区外については、調査区内における分布状

況等から、粘土採掘坑群が更に展開している可能性が高い。なお、坂東山西遺跡の発掘調査の結果、同じ谷の南側斜面部では粘土採掘坑群・土器焼成関連遺構群は、共に検出されなかった。

粘土採掘坑内からは、土器焼成遺構群出土土器と同じ様相を持つ酸化状態の土器と、その前後の時期と思われる土器・瓦等が出土している。多くは、覆土内出土であるが、採掘坑壁面の窪みに意図的に据え置かれたようにほぼ完形の高台付坏・甕・瓦塔部品等が出土した例も存在した。採掘坑内からは、鋤等の掘削具の可能性をもつ木器破片も出土している。

粘土採掘坑群と土器焼成関連遺構群は、一部で重複関係にある。土層観察では、粘土採掘坑(旧)⇒土器焼成遺構⇒粘土採掘坑(新)と、土器焼成関連遺構群が営まれた時期を挟んで、前後の時期に粘土採掘が行われていたことは確実である。このことに加えて、

- ① 両者の出土土器に共通の様相を持つものが多く存在すること。
- ② 粘土採掘坑の場合、前述のように、採掘を進めることが、そのまま、採掘坑を埋めてゆくことに直結することが多かったと考えられ、埋没にさほどの期間を想定する必要がないこと。
- ③ 自然科学的分析の結果、土器焼成遺構出土の土器胎土と、粘土採掘坑の粘土が部分的な類似性を強く持つこと。

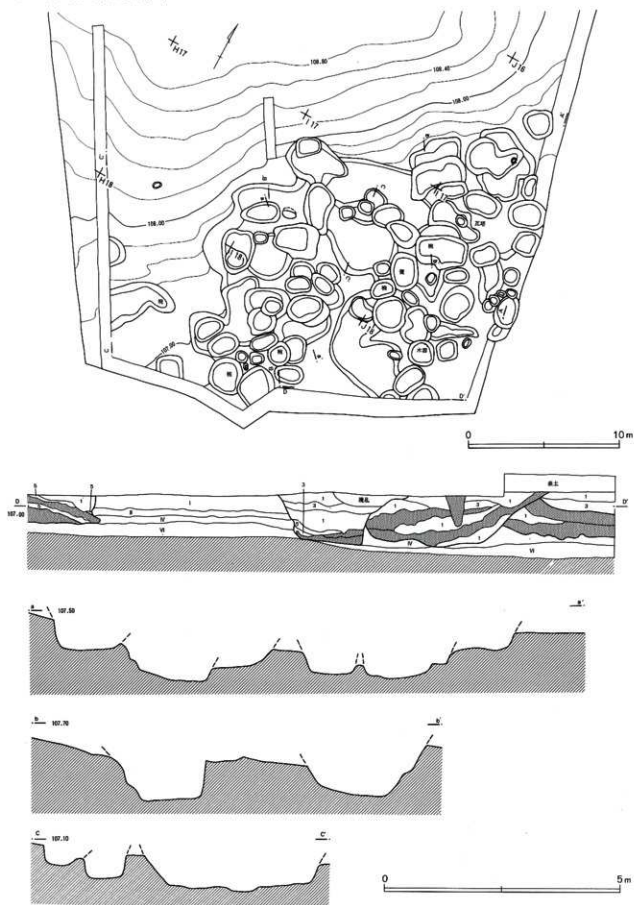
など、両者が併存し、関連をもって営まれた期間が存在した可能性を思わせる状況がある。

出土遺物 (第126～128図)

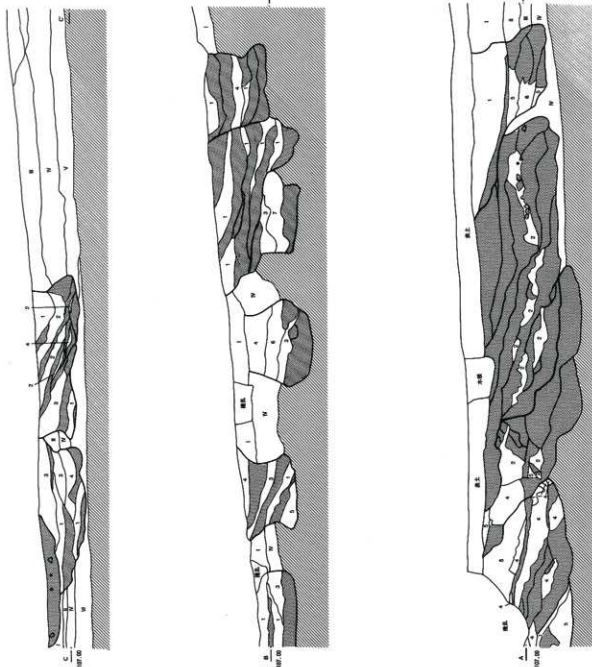
半還元状態の高台付坏14・坏1を除き、全て酸化状態である。いずれも全体或いは部分にロクロ成形痕が観察される。

1～10は坏である。ほぼ直線的に開く逆円錐台形の器形で、体部がやや膨らむもの、口縁が僅かに外反するものもある。大形の坏である9を除くと、口径10.0～11.8cm、底径4.8～5.4cm、器高2.6～3.8cmで、底径/口径は0.42～0.49である。大形の坏9は、口径12.8cm、底径5.4cm、器高3.8cmで、底径/口径は0.42

第124図 粘土採掘坑群(1)



第125図 粘土採掘坑群(2)



基本土層

- I 暗褐色土
- II 褐色土
- III 白色粘質土：(やや粒子粗く 採掘に不適)
- IV 黄褐色粘質土：(酸化鉄沈着顯著)
- V 白色粘質土：(粒子細かく 良質)
- VI 白色粘質土：(V層より礫の混入多)

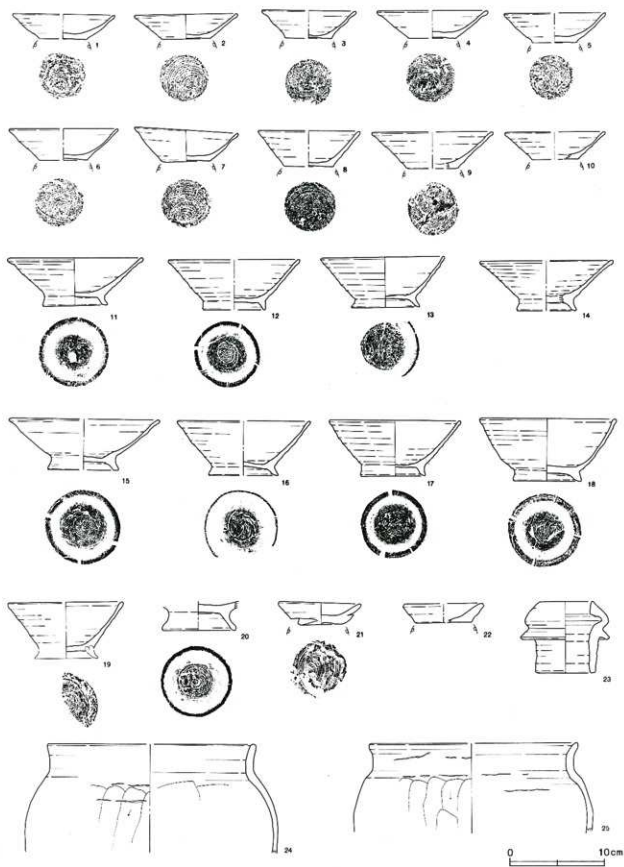
白色粘質土が極めて密に含まれる土層

粘土採掘坑群覆土

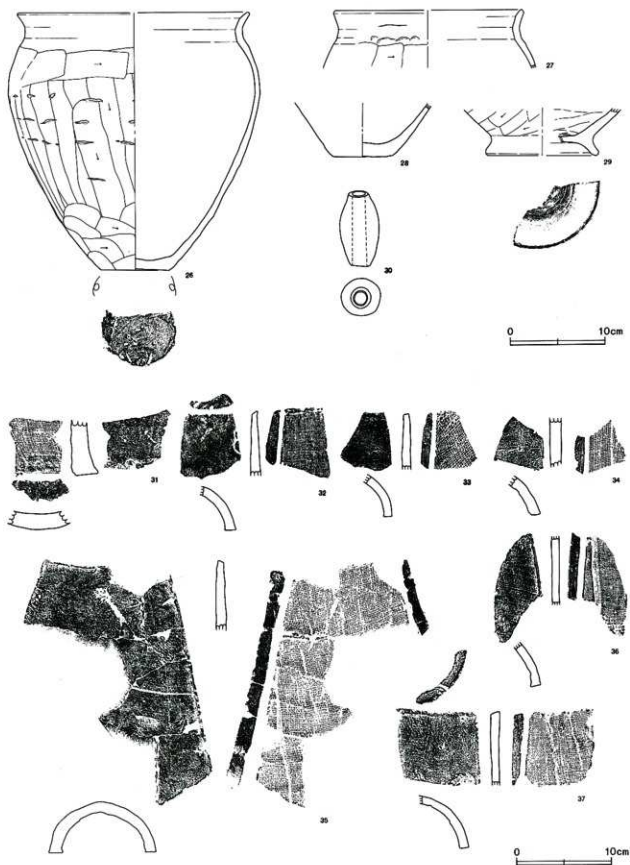
- 1 暗褐色土：粘土粒・粘土ブロック少
- 2 褐色土：焼土粒
- 3 暗黒褐色土：粘土粒・粘土ブロック少
- 4 褐色土：粘土粒・粘土ブロック少
- 5 黒褐色土：粘土粒・粘土ブロック少
- 6 暗黄褐色土
- 7 暗灰褐色土：粘土粒・粘土ブロック少
- 8 黒褐色土：炭化物少

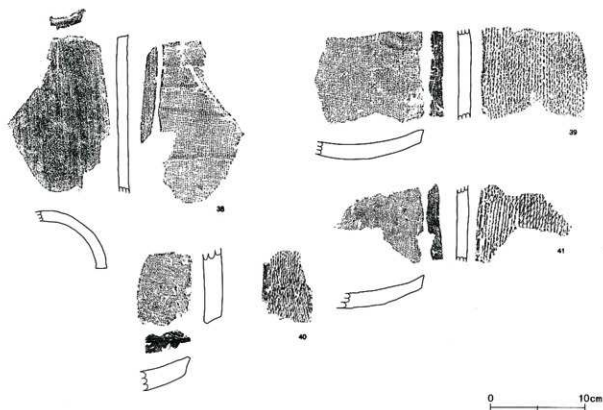
0 5m

第126圖 粘土採掘坑群出土遺物(1)



第127圖 粘土採掘坑群出土遺物(2)





である。底部は回転糸切り離し後未調整である。いずれの坏も内面はナデ調整されるが、本遺構では外面にもナデ調整が施される例が多い。

11～20は高台付坏である。16・20を除いて、ほぼ直線的に開く逆円錐台形の体部を持つ。口径は13.0～16.0cmである。16は、他と異なり、内彎する体部を持つ。いずれも底部回転糸切り離し後に高台を貼付する。内面にはナデ調整が施されるが、外面下半にもナデ調整が施される例が多い。20は、いわゆる足高台高。17は表裏全面に炭化物が厚く沈着する。

21・22は小皿である。器壁は厚く、底部は回転糸切

り離し後未調整である。21は回転糸切り離しに失敗したような痕跡を残す。

23は瓦塔の部品(相輪基部)と考えた。屋蓋部に埋め込まれるべき部分に使用痕跡は見られない。

24～28は甕である。体部外面に篋削りが施されるが、器壁は全体的に厚いのが特徴である。外面に粘土帯接合痕を残すものが多い。26の底部は、風化のため不明瞭だが、回転糸切り離し後未調整と思われる。

29は高台付の甕か。底部回転糸切り離し後に高台を貼付する。30は土錘である。31～38は丸瓦、39～41は平瓦である。

第17表 粘土採掘坑群出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施色	残存率	付着物	備考
1	環	(10.8)	2.6	5.0	W襷 WB 石莖	D 灰白色	35		内外面ナデ調整? 半還元状態
2	環	(11.0)	2.6	5.2	GB襷 WGB 鉄	C 褐色	85		内外面ナデ調整
3	環	(10.0)	2.9	4.9	GR襷 WB 鉄	D 明黄褐色	30		
4	環	(11.8)	2.9	5.0	GBR襷 WGB 鉄 石莖	D 褐色	60		内外面ナデ調整?
5	環	(10.8)	3.1	4.8	GB襷 WGB 鉄	D 淡黄色	60		内外面ナデ調整?
6	環	(11.6)	3.3	5.0	GB襷 WG 鉄	D 灰白色	40		内外面ナデ調整?
7	環	(11.1)	3.8	5.0	GR襷 WG 鉄	D 淡黄色	75		内外面ナデ調整?
8	環	(10.8)	3.7	5.2	GB襷 WG 鉄	D 淡黄色	50		
9	環	(12.8)	3.8	(5.4)	WGB襷 WGB 鉄	D 黄褐色	35		内外面ナデ調整?
10	環	(10.6)	2.9	(5.0)	GB襷 WGB 鉄	D 明黄褐色	25		内外面ナデ調整?
11	高台付環	14.4	5.2	6.8	WG襷 鉄	D にぶい黄褐色	85		内外面ナデ調整?
12	高台付環	(14.0)	5.3	(6.6)	BWG襷 鉄	C にぶい黄色	40		内外面ナデ調整?
13	高台付環	13.0	5.3	(7.3)	WGR くされ襷 鉄	E 褐色	50		内外面風化剥落
14	高台付環	(14.2)	5.3	(6.2)	GW襷	C 灰白色	40		半還元状態
15	高台付環	(16.0)	5.5	7.5	WRG襷 鉄	D 浅黄褐色	50		内外面ナデ調整
16	高台付環	(14.2)	5.7	7.4	WGR襷 鉄	E 明黄褐色	35		内外面ナデ調整?
17	高台付環	14.0	6.0	6.8	WRB襷 炭化物	C にぶい黄色	90	内外面炭化物厚く沈着	
18	高台付環	14.5	6.6	7.3	WR襷 鉄	D 褐色	90		内外面ナデ調整?
19	高台付環	(12.3)			WB襷 B 鉄 石莖	D 淡黄色	20		内外面ナデ調整?
20	高台付環			7.9	WR襷 WGB 鉄	C 褐色	底部100		足高台台?
21	小皿	8.8	2.5	5.8	WB襷 W 鉄	D 褐色	75		回転継ぎ離し失敗痕跡
22	小皿	(8.6)	2.0	(6.2)	R襷 WB 鉄	C にぶい黄褐色	口縁部破片		
23	瓦塔部品	5.3	7.5	6.4	G襷 鉄 石莖	D 褐色	95		底内径5.3、最大径9.4、粗輪基部か? 使用痕跡なし
24	甕	(22.2)			WG襷 鉄	C にぶい黄色	口縁部10		
25	甕	(22.2)			WG襷 鉄	C 褐色	口縁部10		
26	甕	(24.7)	(27.1)	(7.3)	WRGB襷 WRGB 鉄	D にぶい褐色	35	内面下部炭化物	
27	甕	(20.1)			WGB襷 鉄 石莖	D 明赤褐色	口縁部20		
28	甕			6.3	GW襷 鉄	C 黄褐色	底部100	内外面炭化物厚く沈着	
29	甕			(12.0)	WR襷 WG 鉄 石莖	D 明黄褐色	底部30		高台付
30	土鉢				WR襷 WB 鉄	D にぶい黄色	100		長さ7.9、最大径4.1、孔径1.4、重さ107.9g

番号	種別	広端	狭端	長さ	厚さ	胎土	施色	残存	凹面	凸面	端面	側面
31	丸瓦				1.6~2.0	W襷 WB	B 灰	破片	布目5×5	ナデ調整(縦)	ナデ調整	
32	丸瓦				0.7~1.2	WG 鉄	D 灰白	破片	布目6×6	ナデ調整(横)	無調整	箇所り
33	丸瓦				0.7~0.9	W	B 赤褐	破片	布目5×5	ナデ調整(横)	無調整	箇所り
34	丸瓦				1.2~1.3	W	B 褐灰	破片	布目6×6 周辺	ナデ調整(横)		箇所り
35	丸瓦		(8.6)		0.7~1.1	WG襷 WG 鉄	D 灰白	30	布目5×5	ナデ調整(横)縄目消す	箇所り	箇所り
36	丸瓦				0.8~1.0	WG襷 WG	D 灰白	破片	布目7×7	ナデ調整(縦)	箇所り	箇所り
37	丸瓦				0.8~1.1	WG襷 WG	D 浅黄	破片	布目7×7	ナデ調整(横)縄目消す	箇所り	箇所り
38	丸瓦				1.0~1.4	WG襷 WG	D 灰白	破片	布目5×6	ナデ調整(縦)	箇所り	箇所り
39	平瓦				1.3~1.7	WG 鉄	C 黄灰	破片	布目5×5	縄目3本	箇所り	箇所り
40	平瓦				1.7~2.1	W襷 WB	C 灰	破片	布目8×8	縄目4本	箇所り	箇所り
41	平瓦				1.2~1.8	W襷 WB	C にぶい赤褐	破片	布目8×8	縄目3本	箇所り	箇所り

(4) その他の遺構

第1号土壌 (第129図)

E 2グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、規模は長径1.57m、短径0.66m、深さ0.16mであった。

遺物は出土せず、時期は不詳である。

第2号土壌 (第129図)

E 3グリッドに位置する。平面形は長楕円形と推定され、規模は長径1.31m以上、短径0.90m、深さ0.32mであった。

遺物は出土せず、時期は不詳である。

第3号土壌 (第129図)

D 4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.95m、短径1.55m、深さ0.25mであった。

遺物は出土せず、時期は不詳である。

第4号土壌 (第129図)

C 8グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は直径0.86m、深さは0.24mであった。

遺物は出土せず、時期は不詳である。

第5号土壌 (第129図)

C 9グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長径1.76m、短径1.45m、深さ0.53mであった。

覆土内から、須恵器小片が出土している。時期は平安時代以降と考える。

第6号土壌 (第129図)

D 9・10グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、規模は長径1.58m、短径0.55m、深さ0.23mであった。

覆土に大粒の焼土粒及び炭化物粒を含む。

覆土内から、須恵器小片が出土している。時期は平安時代以降と考える。

第7号土壌 (第129図)

D 10グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸長1.50m、短軸長0.42m、深さ0.25mであった。

覆土に大粒の焼土粒及び炭化物粒を含む。

覆土内から、瓦小片が出土している。時期は平安時代以降と考える。

第8号土壌 (第129図)

D 9・10グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、

規模は長径1.81m、短径0.78m、深さ0.24mであった。

覆土に大粒の焼土粒及び炭化物粒を含む。

覆土内から、酸化状態の土器小片が出土している。

時期は平安時代以降と考える。

溝跡 (第103・130図)

森坂遺跡の発掘調査では、溝跡33条を検出したが、大半は、覆土に近・現代の陶磁器等を混じており、土地の区画或いは農耕等に関連した溝と推定された。

第11号溝跡及び第15号溝跡は、約26～28m離れてほぼ平行し、覆土は、共に暗茶褐色土で焼土粒・炭化物粒を含む。いずれも底面直上で須恵器或いは土錘を出土しており、覆土中に他の時期の遺物を含まない。この2条については、平安時代に遡る可能性のある溝跡と考えた。なお、第11号溝跡は尾根部に沿って、第15号溝跡は等高線に平行して掘られており、流水を目的とする溝ではないと考えられた。

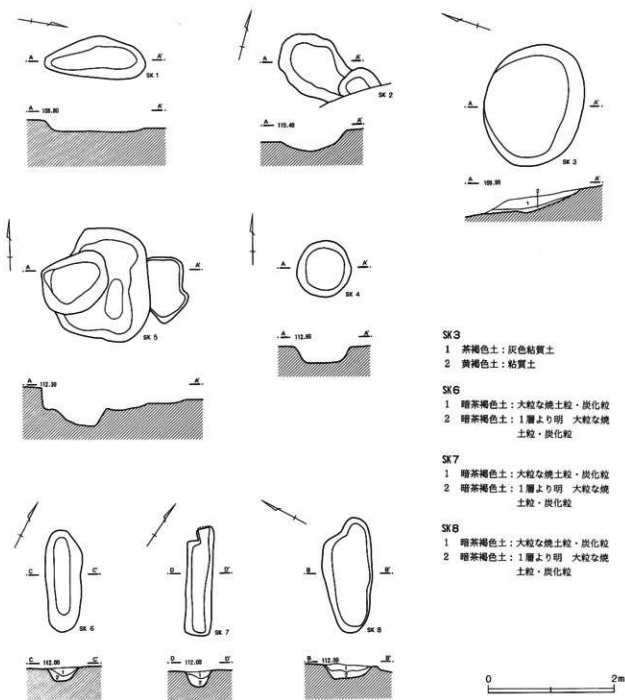
出土遺物 (第131図)

第11号溝跡出土の1・2・5は、いずれも須恵器である。1は壺或いは甕の底部、2は高台付碗の底部か。5は長頸瓶の頸部と思われる。

3・4は第15号溝跡出土である。3は須恵器の甕或いは甕の底部、4は土錘である。

6は半還元状態の小皿で、近世の燗台と考えられる。底部中央に焼成前に小孔を穿つ。内面には蠟?の付着が見られる。7は志野、8は瀬戸灰釉か。いずれも削り出し高台である。9・10は砥石である。

第129図 土壌



SK3

- 1 茶褐色土：灰色粘質土
- 2 黄褐色土：粘質土

SK6

- 1 暗茶褐色土：大粒な焼土粒・炭化粒
- 2 暗茶褐色土：1層より明 大粒な焼土粒・炭化粒

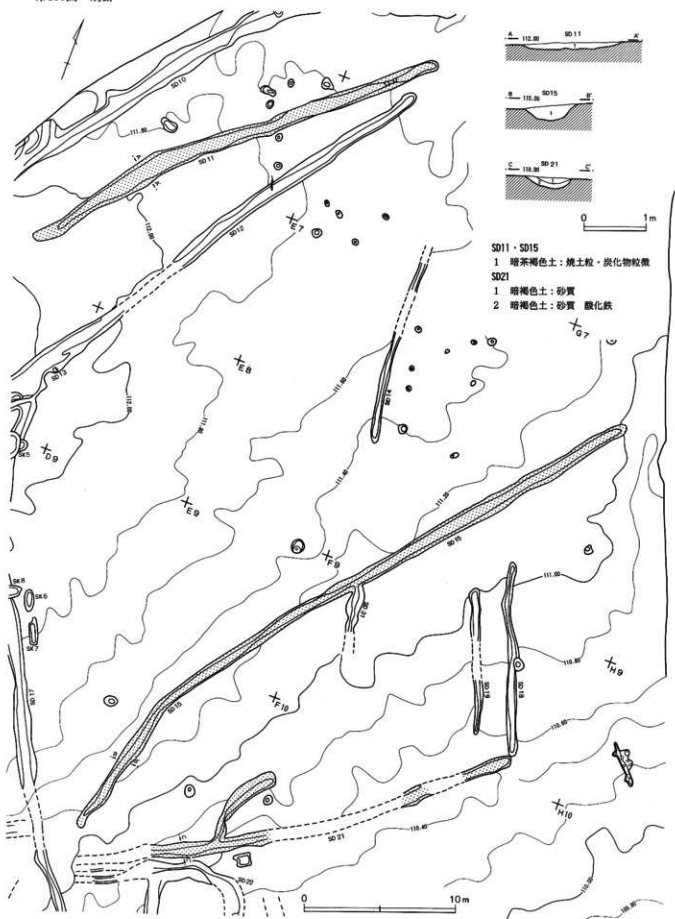
SK7

- 1 暗茶褐色土：大粒な焼土粒・炭化粒
- 2 暗茶褐色土：1層より明 大粒な焼土粒・炭化粒

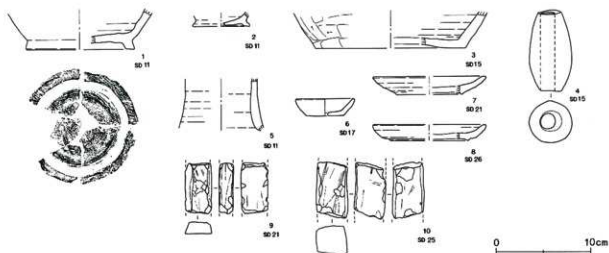
SK8

- 1 暗茶褐色土：大粒な焼土粒・炭化粒
- 2 暗茶褐色土：1層より明 大粒な焼土粒・炭化粒

第130图 溝跡



第131図 溝跡出土遺物



第18表 溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	残存率	付着物	備考
1	壺・甕?			11.6	WB	B 灰黄色	底部80		須恵器、高台付
2	高台付碗?			(6.0)	WB	B 灰オリーブ色	底部45		須恵器、高台付
3	壺・甕?				W	A 灰黄褐色	底部破片		須恵器
4	土鍾				WG礫 WG 石英	D 黄褐色	100		長さ9.3 最大径3.9、孔径1.5、重さ127.0g
5	長頸瓶				WB	B 灰色	頸部破片		須恵器
6	燗台	(6.3)	(1.8)	(3.7)	WB 鉄	D 暗灰黄色	50	内面に蠟?付着	底部中央に焼成前の孔(直径5mm)
7	施釉陶器皿	(11.9)	(1.9)	(7.0)		灰白色	口縁部破片	全面に厚く釉かける	志野か 削り出し高台
8	施釉陶器皿	(12.0)	(1.7)	(8.2)		淡黄色	口縁部破片	全面に厚く釉かける	瀬戸灰釉か 削り出し高台
9	砥石					灰黄褐色			
10	砥石					淡黄色			

(5) グリッド出土遺物 (第132～134図)

縄文土器

森塚遺跡出土の縄文土器は、早期から中期の破片であるが、主体は前期の土器群である。また、61の中期の完形品は、遺跡の周辺で採集されたものである。

第1群土器 (第132図1～9)

早期の土器群を一括する。

第1類 (1～5)

押型文系土器群を一括する。5点のみ出土したが、1～4は山形押型文土器、5が楕円押型文土器である。

山形押型文土器は、やや間隔を開けた帯状施文土器であり、1の様に口縁部で横帯、2～4の様に胴部で縦帯構成を採る。1の口縁部には、丸棒状工具による斜位の押玉状の刻みが施される。

5は楕円押型文が横位に施文されており、帯状施文に見えるが、微かに横位密接施文されている。

第2類 (6～9)

条痕文系土器群を一括する。6、7は比較的繊維を少なく含み、内外面に擦底状の条痕文を施しており、6は底部付近の破片である。

8、9は繊維を多く含み、内外面に粗い条痕文を施文する。条痕文系土器群の後半期の様相を呈している。

第II群土器 (第132図10～第133図58)

前期の土器群を一括する。

第1類 (10～14)

繊維を含む黒浜式土器を一括する。10は胴部の区画に爪形文状の2列の刺突文列を施文する。11、12は無節の羽状縄文、13は単節縄文が施文される。14は上げ底の強い底部であり、やや縦走する縄文RLが施文されるが、底面には施文されない。

第2類 (15～27)

諸磯b式終末から諸磯c式の土器群を一括する。モチーフは全て半截竹管による平行沈線文で描かれ、地文に条線文や縄文を施すものである。15は口縁の開く深鉢形土器で、横位の平行沈線文のみを施す。16、23、24は口縁部が強く屈曲する4単位の波状口縁で、16は平行沈線のモチーフを施し、23、24は縄文を施文する。

18、19は横帯区画内に曲線状のモチーフを描き、20は多段の横帯区画内に、鋸歯状文を施文する。17、21、22は横帯区画線のみ見られる。25～27は集合沈線文や条線文を地文とするものである。

以上の土器群は、諸磯b3式から諸磯c式として認定されるが、b3式とc式の境界が不明瞭であるとともに、15の平行沈線文の地文に結節浮線文が付くことc式となることを考慮して、ここでは、これ等の土器群を一括的に捉えて、諸磯c式の古段階の様相として把握して置きたい。

第3類 (28～35)

前期最終末の土器群を一括する。28、30、31は諸磯c式系統の条線文土器で、28は綾折状に、30はモチーフ状に、31は鋸歯状に平行沈線文の条線文を施す。

32、33は折り返し状の段部部を持つ、縄文を施した口縁部破片である。口縁部裏面に見られる横位の強い削りか特徴的であり、32には三角印刻が施される。34、35は集合結節沈線文でモチーフを描くものであり、35にはモチーフ間を挟る、三角印刻文が見られる。

以上、第3類は諸磯c式系統の条線文土器と、所謂十三菩提式がセットとなる、前期最終末の様相を示しているものと思われる。

第4類 (36～58)

地文のみの土器群を一括する。36～38、49～51は単節斜行縄文、39は縦走縄文、40～45無節の結束羽状縄文、46～48は付加条縄文縄文で、47、48は結束する。52、53は無節縄文である。54～57は細かい捻糸文で、58は無文土器である。

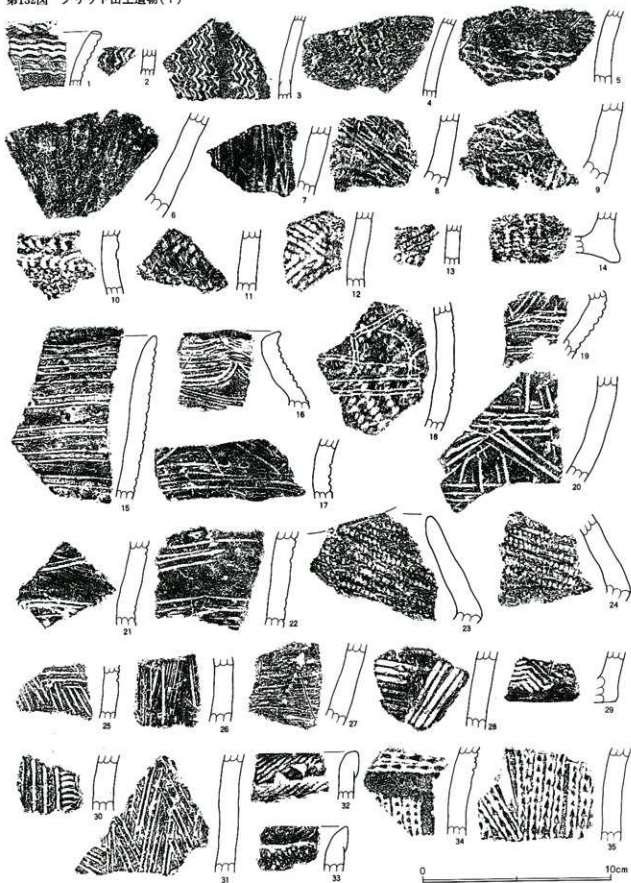
これ等の破片は、殆どが前期最終末の十三菩提式の段階に伴う縄文土器と思われる。

第III群土器 (第133図59～61)

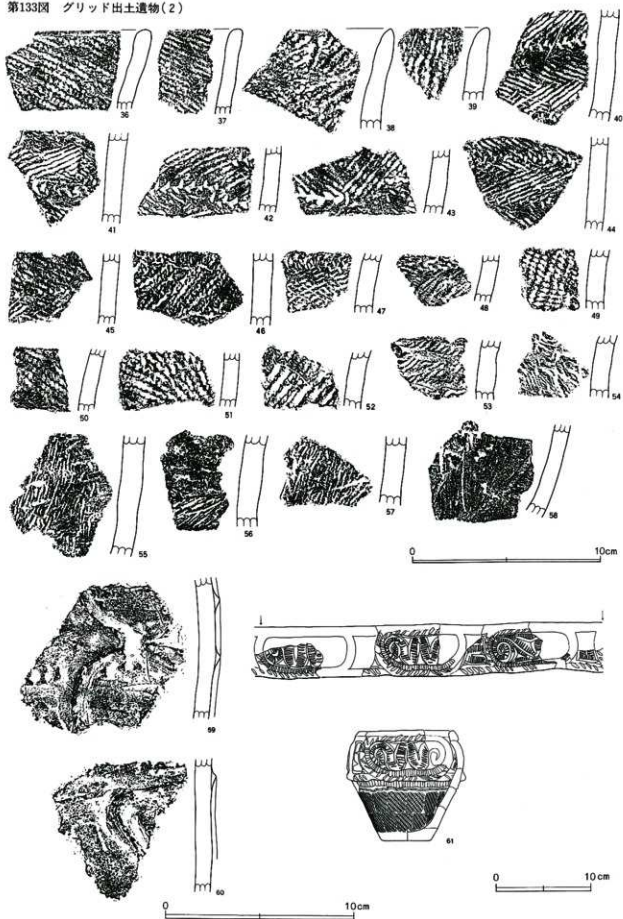
中期の土器群を一括する。59、60は阿玉台I b式の胴部破片で、断面三角形の隆帯が懸垂し、器面にひだ状の整形が見られる。

61は勝坂式終末期の小型土器で、内彎する口縁部に3単位の楕円区画文を配する。区画内の充填モチーフは何れも異なり、隆帯上や区画内に刻みを施す。

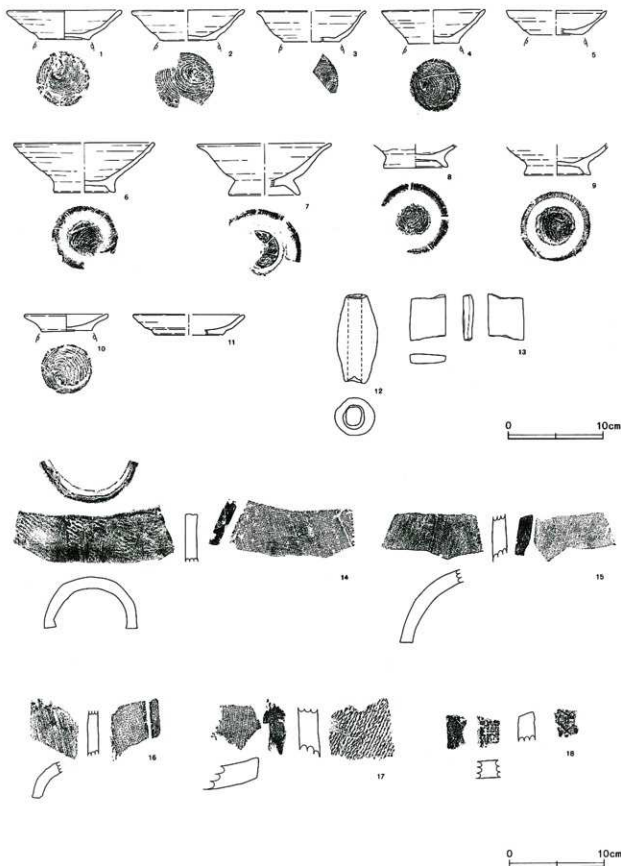
第132図 グリッド出土遺物(1)



第133図 グリッド出土遺物(2)



第134図 グリッド出土遺物(3)



平安時代以降 (第134図)

坏1・同2・同4・高台付坏6・同8・同9と、酸化焙焼成土器の大半は、土器焼成遺構群が検出されたJ17グリッドの出土である。坏5はI14、小皿10はJ16グリッド出土。須恵器坏3・高台付坏7・施釉陶器皿11は表面採集であった。なお、土鍾12はJ18、砥石13はJ17グリッドの出土である。

1・2及び4・5は酸化焙焼成の坏である。ほぼ直線的に開く逆円錐台形の器形である。底部は回転糸切り離し後未調整である。いずれの坏も内面はナデ調整されるが、1・2は外面にもナデ調整が施される。4の口縁端部は、他の酸化焙焼成坏と異なり、鋭く作られる。

3は須恵器の坏である。底部は回転糸切り離し後未調整である。

6～9は高台付坏である。6は、ほぼ直線的に開く

逆円錐台形の体部を持つ。底部は、回転糸切り離し後に高台を貼付する。内面にはナデ調整が施されるが、外面下半にもナデ調整が施される。8・9は6に近い。表面採集の7は、体部下半に腰を持ち、口縁は外反する。器壁は厚く、胎土は、6・8・9と比較して緻密である。底部は、回転糸切り離し後に高台を貼付する。内外面にナデ調整が施される。

10は小皿である。体部は全体的に外反する。内外面ナデ調整、底部は回転糸切り離し後未調整である。

11の施釉陶器皿は、二次的被熱のためか、割れ口には炭化物が沈着し、釉は灰オリーブ色に変色している。釉は底面を含む全面に厚くかけられる。高台は削り出し高台である。

12は土鍾。13は砥石である。

14～16は丸瓦。17・18は平瓦で、18の裏面には格子目印き痕が残る。

第19表 グリッド出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施釉	色調	残存率	付着物	備考
1	坏	12.3	3.1	5.4	WG礫 WG 黒石炭	D	浅黄褐色	80		
2	坏	(12.0)	3.2	6.0	GR礫 G 鉄	C	明赤褐色	25		
3	坏	(11.6)	3.2	(6.0)	W礫 W	B	灰色	15		須恵器
4	坏	(11.0)	3.5	5.5	WGB礫 WG 黒石炭	D	橙色	25		
5	坏	(10.6)	2.6	(5.6)	RGB礫 WG 黒石炭	D	黄褐色	30		
6	高台付坏	(15.0)	5.3	6.4	WG礫 WGB 鉄	D	浅黄褐色	60		
7	高台付坏	(14.4)	5.5	(7.6)	R礫 WB 鉄 組	C	橙色	45		
8	高台付坏			6.8	WG礫 WG 鉄	C	明黄褐色	底部90		
9	高台付坏			7.0	WB礫 WB 鉄	D	灰黄色	底部100		
10	小皿	8.9	1.9	5.3	G礫 WB	C	にぶい黄褐色	100		
11	施釉陶器皿	(12.0)	2.2	(7.2)	W	B	灰白色	口縁部破片	全面に厚く釉かける	二次的被熱で変色、削り出し高台
12	土鍾				W礫 W	C	にぶい褐色	100	全面炭化物沈着	長さ8.3、最大径4.3、孔径1.6、重さ144.7g 縦4.8、横3.8、厚さ1.0
13	砥石									

番号	器種	広端	狭端	長さ	厚さ	胎土	施釉	色調	残存	内面	凸面	端面	側面
14	丸瓦		8.8		1.0～1.5	WB	A	灰	破片	布目7×7	ナデ調整(横)縄目消す	浅い凹み	篋削り
15	丸瓦				1.2～1.6	W礫 W	A	灰	破片	布目12×11	ナデ調整?		篋削り
16	丸瓦				1.0～1.2	W	B	褐灰	破片	布目5×6	篋削り(縦)?		篋削り
17	平瓦				2.0～2.2	W礫 WGB	B	灰	破片	布目6×8	縄目3本		篋削り
18	平瓦				1.8～1.9	GB 鉄	D	にぶい黄褐色	破片	布目3×3? 周辺に没有り	格子目印き		篋削り

第20表 八木上遺跡遺構番号新旧対照表

遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号
第1号住居跡	SJ 1	第27号土壌	4次SK 24	第58号土壌	2次SK118	第89号土壌	2次SK369
第3号住居跡	SJ 3	第28号土壌	4次SK 23	第59号土壌	2次SK 7	第90号土壌	2次SK359
第4号住居跡	SJ 7	第29号土壌	4次SK 10	第60号土壌	2次SK 19	第91号土壌	3次SK 1
第5号住居跡	SJ 5	第30号土壌	4次SK 15	第61号土壌	2次SK131	第92号土壌	3次SK 2
第6号住居跡	SJ 6	第31号土壌	4次SK 28	第62号土壌	2次SK 76	第93号土壌	3次SK 4
第1号土壌	4次SK 2	第32号土壌	4次SK 26	第63号土壌	2次SK 81	第94号土壌	3次SK 6
第2号土壌	4次SK 4	第33号土壌	4次SK 29	第64号土壌	2次SK 79	第95号土壌	3次SK 9
第3号土壌	4次SK 6	第34号土壌	4次SK 27	第65号土壌	2次SK 82	第96号土壌	3次SK 10
第4号土壌	4次SK 7	第35号土壌	4次SK 17	第66号土壌	2次SK 90	第97号土壌	3次SK 7
第5号土壌	4次SK 5	第36号土壌	4次SK 25	第67号土壌	2次SK 83	第98号土壌	3次SK 12
第6号土壌	2次SK140	第37号土壌	4次SK 18	第68号土壌	2次SK 93	第99号土壌	3次SK 8
第7号土壌	2次SK141	第38号土壌	4次SK 19	第69号土壌	2次SK 84	第100号土壌	3次SK106
第8号土壌	2次SK203	第39号土壌	2次SK 46	第70号土壌	2次SK 86	第101号土壌	3次SK105
第9号土壌	2次SK190	第40号土壌	4次SK 20	第71号土壌	2次SK 87	第102号土壌	3次SK102
第10号土壌	4次SK 8	第41号土壌	4次SK 21	第72号土壌	2次SK 94	第103号土壌	3次SK103
第11号土壌	2次SK156	第42号土壌	2次SK 45	第73号土壌	2次SK 4	第104号土壌	3次SK101
第12号土壌	2次SK162	第43号土壌	4次SK 22	第74号土壌	2次SK 12	第105号土壌	3次SK107
第13号土壌	2次SK182	第44号土壌	2次SK 42	第75号土壌	2次SK 89	第106号土壌	3次SK 88
第14号土壌	2次SK145	第45号土壌	2次SK 40	第76号土壌	2次SK 88	第107号土壌	3次SK 83
第15号土壌	2次SK172	第46号土壌	2次SK 36	第77号土壌	2次SK 98	第108号土壌	3次SK 82
第16号土壌	2次SK144	第47号土壌	2次SK 29	第78号土壌	2次SK 95	第109号土壌	3次SK 81
第17号土壌	2次SK168	第48号土壌	2次SK 31	第79号土壌	2次SK 96	第110号土壌	3次SK 22
第18号土壌	2次SK142	第49号土壌	2次SK 39	第80号土壌	2次SK214	第111号土壌	3次SK 36
第19号土壌	4次SK 12	第50号土壌	2次SK 23	第81号土壌	2次SK220	第112号土壌	3次SK 52
第20号土壌	2次SK173	第51号土壌	2次SK135	第82号土壌	2次SK235	第113号土壌	3次SK 51
第21号土壌	2次SK195	第52号土壌	2次SK 25	第83号土壌	2次SK230	第114号土壌	3次SK 56
第22号土壌	2次SK165	第53号土壌	2次SK 28	第84号土壌	2次SK252	第115号土壌	3次SK 38
第23号土壌	2次SK197	第54号土壌	2次SK 22	第85号土壌	2次SK313	第116号土壌	3次SK 41
第24号土壌	4次SK 9	第55号土壌	2次SK 21	第86号土壌	2次SK324	第117号土壌	3次SK 58
第25号土壌	4次SK 13	第56号土壌	2次SK 20	第87号土壌	2次SK326	第118号土壌	3次SK 66
第26号土壌	4次SK 14	第57号土壌	2次SK 73	第88号土壌	2次SK368	第119号土壌	3次SK 44

第21表 八木遺跡遺構番号新旧対照表

遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号
第1号住居跡	SJ 1	第3号土壌	SK 3	第6号土壌	SK 6	第1号集石土壌	SC 1
第1号土壌	SK 1	第4号土壌	SK 4	第7号土壌	SK 7	第2号集石土壌	SC 2
第2号土壌	SK 2	第5号土壌	SK 5	第8号土壌	SK 8	第3号集石土壌	SC 3

第22表 八木前遺跡遺構番号新旧対照表

遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号
第1号住居跡	1次SJ 1	第4号土壌	1・2次SK 4	第13号土壌	3次SK 5	第22号土壌	3次SK 18
第2号住居跡	3次SJ 1	第5号土壌	1・2次SK 5	第14号土壌	3次SK 6	第23号土壌	3次SK 19
第1号方形配列土壌SK1	3次SK 15	第6号土壌	1・2次SK 6	第15号土壌	3次SK 7	第24号土壌	3次SK 20
第1号方形配列土壌SK2	3次SK 12	第7号土壌	1・2次SK 13	第16号土壌	3次SK 8	第25号土壌	3次SK 21
第1号方形配列土壌SK3	3次SK 13	第8号土壌	1・2次SK 12	第17号土壌	3次SK 9	第26号土壌	3次SK 22
第1号方形配列土壌SK4	3次SK 14	第9号土壌	3次SK 1	第18号土壌	3次SK 10	第1号集石土壌	1・2次SC 1
第1号土壌	1・2次SK 1	第10号土壌	3次SK 2	第19号土壌	3次SK 11	第1号溝跡	3次SD 1
第2号土壌	1・2次SK 2	第11号土壌	3次SK 3	第20号土壌	3次SK 16		
第3号土壌	1・2次SK 3	第12号土壌	3次SK 4	第21号土壌	3次SK 17		

第23表 上広瀬北遺跡遺構番号新旧対照表

遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号
第1号掘立柱建物跡	SB 2	第4号掘立柱建物跡	SB 4	第2号土壇	SK 2	第5号土壇	SK 5
第2号掘立柱建物跡	SB 1	第5号掘立柱建物跡	SB 5	第3号土壇	SK 3	第1号井戸跡	SE 1
第3号掘立柱建物跡	SB 3	第1号土壇	SK 6	第4号土壇	SK 4	第1号焼土跡	SY 1

第24表 森坂北遺跡遺構番号新旧対照表

遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号
第1号住居跡	SJ 1	第1号土壇	SK 1	第5号土壇	SK 5	第9号土壇	SK 10
第2号住居跡	SJ 2	第2号土壇	SK 2	第6号土壇	SK 6	第1号溝跡	SD 1
第3号住居跡	SJ 3	第3号土壇	SK 3	第7号土壇	SK 7	第2号溝跡	SD 2
第4号住居跡	SJ 4	第4号土壇	SK 4	第8号土壇	SK 8	第3号溝跡	SD 3

第25表 森坂遺跡遺構番号新旧対照表

遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号	遺構名称	旧番号
第1号住居跡	SJ 1	第9号土壇	SK 27	第10号溝跡	SD 10	第23号溝跡	SD 23
第1号土器焼成遺構	SF 1	第10号土壇	SK 28	第11号溝跡	SD 11	第24号溝跡	SD 24
第2号土器焼成遺構	SF 2	第11号土壇	SK 30	第12号溝跡	SD 12	第25号溝跡	SD 25
第3号土器焼成遺構	SF 3	第12号土壇	SK 31	第13号溝跡	SD 13	第26号溝跡	SD 26
土器捨て遺構	SX 4	第1号溝跡	SD 1	第14号溝跡	SD 14	第27号溝跡	SD 27
第1号土壇	SK 5	第2号溝跡	SD 2	第15号溝跡	SD 15	第28号溝跡	SD 28
第2号土壇	SK 6	第3号溝跡	SD 3	第16号溝跡	SD 16	第29号溝跡	SD 29
第3号土壇	SK 7	第4号溝跡	SD 4	第17号溝跡	SD 17	第30号溝跡	SD 30
第4号土壇	SK 8	第5号溝跡	SD 5	第18号溝跡	SD 18	第31号溝跡	SD 31
第5号土壇	SK 20	第6号溝跡	SD 6	第19号溝跡	SD 19	第32号溝跡	SD 32
第6号土壇	SK 24	第7号溝跡	SD 7	第20号溝跡	SD 20	第33号溝跡	SD 33
第7号土壇	SK 25	第8号溝跡	SD 8	第21号溝跡	SD 21		
第8号土壇	SK 26	第9号溝跡	SD 9	第22号溝跡	SD 22		

IX 調査の成果と課題

1. 縄文時代前期の土器群

1. 八木上遺跡出土の前期終末の土器群について

今回の一連の圏央道関係の発掘調査では、従来、県内において出土例の少なかった前期終末の良好な土器群が出土している。八木上遺跡においても十三菩提式期の住居跡が2軒と、土壌が多数検出されており、該期の良好な一括土器群が出土している。各遺跡毎に分類、記述しているが、ここでは再度、八木上遺跡出土の土器群を中心として系統別に分類し、その編年の位置付けについて検討するとともに、周辺の遺跡との関連についても検討を加えていきたいと思う。

1. 土器群の分類

前期終末とする土器群は、諸磯c式土器以降を対象とする。諸磯c式土器は、本報告書に収録されている遺跡では八木上遺跡、八木前遺跡、森坂遺跡で出土しており、八木上遺跡では出土量も多く、3つの段丘面毎に様相の異なる土器群が出土している。また、遺跡毎に若干土器群の様相が異なり、それぞれの差異が時間差を示唆している可能性もある。

そのため、諸磯c式土器も前期末葉の土器群として扱い、終末期の土器群と同様に分類することによって、前期末葉の土器群から終末期の土器群への変遷を、地域的なミクロの視点から検討してみたいと思う。

従来、埼玉県ではこの時期の土器群の推移を明らかにする遺跡はほとんどなく、各時期の遺跡が散発的に知られていたのみであり、大局としての土器群の推移の把握は、他県の成果を援用せざるを得なかったのが現状であった。耳状の貼付文を特徴とする諸磯c式は北関東を中心とした地域の成果を、結節浮線文系の諸磯c式および、鍋屋町式、十三菩提式は北陸地方から中部地方を経て、南関東の土器群の研究成果を参考としていたが、県北西部では貼付文系の諸磯c式が、県南部では結節浮線文系の土器群が分布し、十三菩提式

土器も県南部に分布が集中する傾向にあり、他地域の研究成果からはさながら時期差と判断される材料を提供しているかの様な状況を呈している。

しかし、県西南部に位置する圏央道で調査された遺跡では、耳状の貼付文系土器こそ出土していないが、遺跡や地点を違えて様相の異なる結節浮線文系土器が出土している。それぞれが時期差なのか、系統差なのかは組成が十分に把握されない限り判断の難しい問題ではあるが、土器群の相違を検討する良い材料となる。また、諸磯c式以降の土器群の理解についても、特徴的な異系統性と在地系土器の残存性を考慮して組み合わせを把握することが最も重要なこととなる。

以下、八木上遺跡を中心として、とりあえず系統的に土器群を整理して置きたい。大きな系統差を群別とし、想定される時間差を類別、構成要素を種別として大まかに分類した。

土器群は大きく、

第I群土器…諸磯b式、c式系統の在地系土器群

第II群土器…鍋屋町式、十三菩提式系土器群

第III群土器…大木5式系土器群

第IV群土器…円筒下層式系土器群

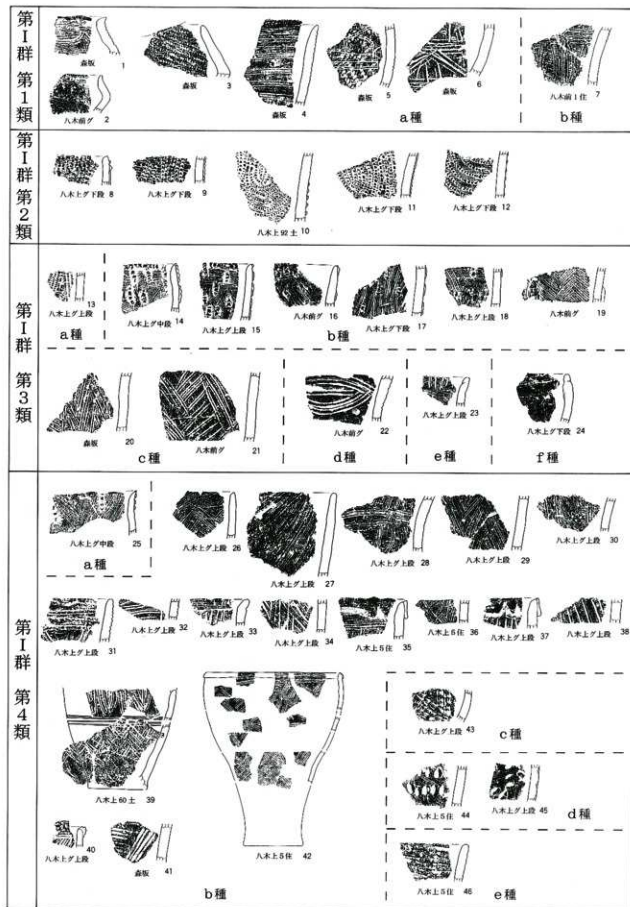
の4群に分類される。

第I群土器はさらに1類～4類に分類され、各類はそれぞれ種別分類される。第II群土器、第III群土器、第IV群土器は類別はされないものの、各種別に分類される。

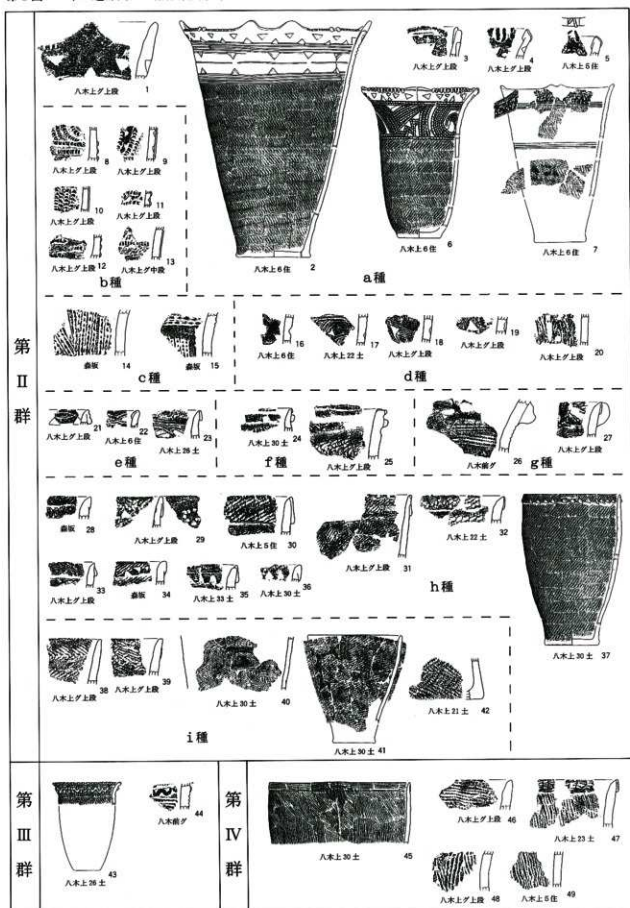
第I群土器（第I図）

第1類は、諸磯b式最終末の段階から諸磯c式にかけての土器群であり、諸磯b式最終末のa種（1～6）と、諸磯c式の古段階であるb種（7）とを一括した。a種は短い口縁部が内折するもの（1～3）と、開く器形のもの（4）が存在する。文様は集合条線文を施

第1図 八木上遺跡出土土器分類図(1)



第2図 八木上遺跡出土土器分類図(2)



文するもの(1、2)と、半截竹管の平行沈線文を条線状に施文するもの(4-6)があり、諸磯c式への移行期の様相を示している。b種(7)は口縁部が開く器形で、集合条線文による多段区画内に従位レンズ状文を施文するものと思われ、諸磯c式の上段階の様相を呈する。7はレンズ状文を施す区画内の地文にも横位の条線文を施文しており、条線文を多用する2等と共通し、諸磯b式とc式との中間的な様相を呈している。従って、a種とb種は近似した時間内に位置付けられることが可能と判断され、第1類として纏めた。

a種は森坂遺跡のグリッドでやや纏まって出土しており、八木前遺跡ではa種とb種が少量出土している。

第2類は、結節浮線文系の土器群を一括した。a種(8-12)の1種類のみであり、a種は地文に半截竹管状の平行沈線文による条線文を施文し、連続した結節浮線文(10-12)で渦巻文とそれを連結するモチーフを構成するもの(13)である。第2類は、従来、諸磯c式の新段階と解釈されてきたが、近年、否定的な見解も出されている。第1類との時間差は明瞭であるが、所謂貼付文系の諸磯c式土器が出土していないため、両者の関係は不明であると言わざるを得ない。しかし、結節浮線文系の出自と変遷系統を考慮すると、両者の土器群の相違は、系譜の相違に起因する可能性が高い。この遺跡群では諸磯c式段階の典型的な土器群として、第1類の次の段階に位置付けて考えて置きたい。八木上遺跡の中位から下位にかけての段丘面上の土壌や包含層から出土しており、上位段丘面からは出土していない。

第3類は、結節手法や集合沈線文を施文する土器群で、第2類の系譜下にある土器群である。a類(13)は地文に条線文を施文して、その上にミミズ腫れ状の結節浮線文を施文するものである。平行沈線文の地文から条線文へ、結節浮線文からミミズ腫れ状の結節浮線文へという変化から、第2類a種の直接的な系譜下にあるものと思われ、時間差が存在するものと判断される。

b種は棒状の貼付文の上に、結節状の刻みを施し、地文に鋸歯状の集合条線文を施文するものである。棒状貼付文は2個対に施文されたり(14)、比較的ランダム(15)であったり、口縁部に連続的に施文されたり(17)する。胴部では瘤状(17、18)や、従位の隆帯状(19)であったりする。結節というよりも、刺突状の刻みを施す。口唇外端部には、貼付文よりやや細い浮線文をやや間隔を開けて部分的に巡らせ、結節状の刻みを施す(14、15)のが特徴的である。口唇部は内削状を呈し、14、15は内面を丁寧に磨く。

c種は半截竹管状の平行沈線文を鋸歯状(20)及び綾杉状(21)に施文するもので、櫛歯状工具の集合条線文の鋸歯状文も存在する。

d種は半截竹管状の平行沈線文で横位のレンズ状文を描くもの(22)であり、地文には何も施文されない。第1類土器のb種のレンズ状モチーフや、第2類段階の渦巻き文が沈線文化として簡略化されたモチーフ等の系統を引くものと思われるが、印刻文等は施されない。

e種は口縁部に従位の単沈線文を施文するもので、胴部は無文である。口唇部に1段粘土帯を積み上げ、内面に明瞭な輪痕を残す。この従位の沈線文帯は、東関東地方の土器群である奥津式の影響が看取され、粘土帯貼付による段帯状の成形も、奥津式的であると言えよう。

f種は無文土器であり、口縁部に粘土帯を貼付するのはe種と同様であるが、24は口縁部裏面に貼付する。口縁部がやや内彎する器形であるためとも思われるが、系統的な差異が看取される。内面には従位の強い削り状の整形が施され、表面は指頭による従位の強いナデが施される。e種に近似しており、東関東的な土器群とも思えるが、内面に粘土帯を貼付する手法は、諸磯c式でもあり、また、西日本の北白川下層Ⅲ式系や大歳山式系の要素と捉えることもできる。

以上、第3類土器は全体的には、従来諸磯c式の最新段階に位置付けられてきた土器群と思われるが、本遺跡群においては、I群第4類や、第II群土器と型式学的に近似した様相を持つ。八木上遺跡遺跡の中位段

丘面を中心として、上位から下位段丘面にかけて存在し、八木前遺跡、森坂遺跡から出土している。

第3類土器が、第2類土器と時間差を持つてあろうことは、第4類土器と近似することや、第2類と出土地点が若干異なることから推察される。しかし、八木上遺跡下位段丘面では、第2類と第3類が出土しており、厳密には出土地点の相違における両者の識別は困難である。

第4類は、集合沈線文や条線文を施文する土器群で、第3類と近似しており識別が難しい。a種は棒状の結節貼付文を持つもので、第3類b種からの系譜下にあるものと思われるが、25は八木上遺跡の中段丘面から出土しており、第3類b種と共存する可能性もある。25と第3類b種との相違は、地文条線文が非常に細かく、粗い大きな鋸歯状の施文になることと、裏面整形に削り状の整形を施すことである。更に、棒状の貼付文が単位文的に、口縁部に施文されることである。しかし、口端部へ浮線文を貼付する手法は類似する。

b種は集合沈線文や条線文を施文するもので、第3類c種の系譜下にあるものと思われるが、明瞭に区別しきれない。条線文を施文するものは、a種と同様に施文が粗く大きな鋸歯状を描くもの(26、27、29、30)、文様帯を区画しレンズ状もしくは渦巻き状のモチーフを条線文で施文するもの(28)等がある。半截竹管による集合沈線文を施文するものは区画文や鋸歯状文を構成するもの(31・34)や、口縁部に粘土帯貼付による段帯部を形成し、印刻文を施文するものもある(35、37)。胴部のモチーフは諸磯c式から継承される従位区画の中に格子目文を施文するもの(36)や、集合沈線文を垂下するもの(38)、文様帯を区画して従位のレンズ状文と鋸歯状文を施文するもの(39)、集合沈線文を綾杉状に施文するもの(40~42)等がある。40は口端部に隆帯を貼付し、集合沈線文の工具で押し引き状の刺突文を巡らせている。42は口縁部に粘土帯を貼付して幅狭の段帯部を形成し、集合沈線文の工具で条線文を施文する。また、胴部は何帯かに区画され、多段構成となる。

b種の口縁部裏面には、横位の削り状の強い整形が施されるのを特徴とし、特に、段帯部を持つ口縁部に顕著に見られる。

c種は結節刺突文列で、幾何学文を施文するもの(43)である。結節沈線文というよりも、棒状貼付文上への連続刺突手法に類似する。モチーフは31の様な鋸歯状文等を構成するものと思われる。

d種は爪で器肉を掘り起こす様な刺突文を施すもの(44、45)で、諸磯b式の終末あるいは諸磯c式の組成に存在する刺突文を施す土器からの系統と思われる。44は地文に粗い条線文を施文するが、45は無文である。

e種は無文土器で、粗い凹線状の整形が施されるものの(46)である。無文土器の第3類f種の系統上にあるものと思われ、指頭状の整形が凹線状の整形へと変化したものと捉えられるが、両者が共存する可能性もある。

以上、第4類は明らかに諸磯c式の系統上に位置する土器群であり、第3類からの微妙な変化の過程として把握される土器群である。第3類と第4類を明瞭に区分する根拠はなく、第3類の方が広範囲に分布するという分布的な相違があるだけである。第4類は森坂遺跡からも出土しているが、殆ど全てが八木上遺跡の上位段丘面から出土しているものであり、特に、第5・6号住居跡では明らかに十三菩提式系統の土器群と共存している。十三菩提式段階に残存する、諸磯c式系統の土器群としての位置付けが可能となる。

第II群土器(第2図1~42)

鍋屋町式及び十三菩提式系統の土器群を一括する。文様帯構成や文様構成で種別される。

a種は口縁部に外反する印刻文帯(1~6)もしくは刺突文帯(7)を持ち、胴上半部にやや幅の狭い文様帯を持つものである。口縁部は双頭の小さ波状(1、2、7)もしくは貼付文の突起を付けるもの(3、6)が多く、大波状口縁はない。口縁部の外面(1、2)もしくは内面(3~7)のいずれかに粘土帯の貼付による段帯部を形成することの特徴とし、口唇上には刻

み(1、2)や、浮線文を貼付する(4~6)。口縁部内面の段帯部や口唇上の浮線文(4、5)、2個対の貼付文(2)等の要素は、諸磯c式貼付文系土器群の系譜下にあるものと思われる。口縁部の印刻文帯は、上下の三角印刻文を交互に組み合わせたり、上下に対応させたりして、文様効果をあげており、2では胴部文様帯内のモチーフとしても三角印刻文が使用されている。胴部の文様は、渦巻き文を連結する諸磯c式以来のモチーフを基本とし、6は集合結節沈線文で、7は条線文で描出する。胴部縄文は横位回転の縄文に限られ、結束を施すもの(2)、異原体の羽状縄文を構成するもの等がある。

2は三角印刻文を多用することから十三菩提式系、6、7は結節沈線文等て渦巻き文を施文することから鍋屋町式系として分類されることが多いが、主文様が異なるだけで、器形や文様帯構成等が同じことから、ここでは取って分類はしないで置く。

b種は結節浮線文を施文するもの(8~13)で、モチーフ間に細かな対向する三角印刻文を施文する。8~12は同一個体と思われ、やや太い結節浮線文で渦巻き状のモチーフを描く。諸磯c式段階の第1群第2類土器とは、地文がないこと、三角印刻文を施文する点で大きく異なる。13は2本の浮線文を使用し、浮線文には切り込む様な刻みが施され、結節手法は採らない。b種は量は少ないが、特等的な土器群である。

e種は結節沈線文を主として施文するもの(14、15)で、14はモチーフ間に印刻を施す。e種の結節手法は、第1群第3類の棒状貼付文上に施される結節手法と類似し、第2類の結節浮線文手法とは異なる。

d種は条線文でモチーフを描出し(16~20)、モチーフ間に印刻文を施すものである。16、17はモチーフ間に対向する小さな三角印刻文を施文するもので、その構成は結節浮線文のb種と同一である。18、19は櫛歯状の条線文で鋸歯状を基本とした細かなモチーフを描き、そのモチーフに沿って三角印刻文を施すもので、荒神山タイプの大波状口縁土器に類する文様手法である。20は条線文で渦巻き状のモチーフを描き、モチ

フ間を浅く抉る印刻文を施すものである。鍋屋町式や福浦上層式系の要素である。

e種は口縁部に粘土帯貼付の幅状段帯部を構成し、裏面に横位の削り状の強い整形を施して、段帯部及びその下位に幅狭の文様帯を持つもの(21~23)である。段帯部と整形の特徴はa種と同様であるが、口縁部文様帯の構成が異なる。e種は口縁部に平行沈線文による横位に連結するレンズ状文を施文し、21は段帯部の下端部に、22はレンズ状文内と下端部にそれぞれ印刻文を施す。諸磯c式に系譜が求められるレンズ状文、口縁部の幅状段帯部に取り込んだものと推定される。

f種は口縁部に2本の隆帯を巡らすものである(24、25)。24はe種と同様な口縁の段帯部に、横位の深い沈線文を巡らすことによって、2本の隆帯を作出している。25は角頭状の口縁部に2本の隆帯を貼付するもので、胴部はいずれも縄文のみとなる。鍋屋町遺跡(寺村1959)や室ノ木遺跡(塚田1973)に類例があり、系譜的な関係は不明である。

g種はf種に類するもので、貼付隆帯の一部が把手状を成すもの(26、27)である。26は棒状区画の交点部分が把手状を成すもので、27は口縁部貼付隆帯が橋状の把手へと連なるものである。棒状の区画及び把手は、大波状口縁土器の胴部区画文として存在していたものが、北陸地方の口縁部に隆帯文を貼付する系統の要素と融合して、口縁に移行したと思われる。

h種は口縁部に段帯部を形成して、地文縄文のみ施文する土器群である。段帯部はやや幅広のもの(29~31)と、幅狭なもの(28、32~37)があり、下端部に連続の三角印刻文を施文するもの(29、34~37)が多く、34は上下対向の三角印刻文を施文する。口縁部裏面には横位の強い削り状の整形が施されるのを特徴とし、29は裏面に刺突文の円形文が施文される。

この口唇部に段帯部を貼付する成形は、第1群第3類e種、f種に見られる輪積痕を残す成形の系統上にあるものと思われ、埼玉県地域においては東部関東的な系譜の強い要素と認識される。しかし、鍋屋町式系の土器群においても、口縁部の段帯部が確立し、連続

三角印刻文を下端部に施す土器群が存在しており、両者の系譜が融合した状況が看取される。

i 種は単口縁で縄文のみ施文する土器群 (38~42) であり、基本的には羽状縄文を構成するものが多い。成形は、h 種と同様である。縄文は横位回転施文が殆どで、縦位縄文は存在していない。無節縄文は結束するものが殆どであり、41は無節であるが、否結束である。40は胴部に部分的に小さな印刻文を施している。底部は42の様に張り出す器形が殆どである。

第III群土器 (第2図43、44)

波状の隆帯文を施文する、所謂大木5式系の土器群を一括する。波状隆帯を貼付するという点では、2点のみが出土しており、量的には決して多くないが系統的には重要な存在となる。43は口縁部が大きく開く器形で、第II群a種と同様のやや扁平な貼付文が口唇部に付くものである。口縁部には指頭でつまみ、上下にひねりを加えられて波状に成形された隆帯文が1本巡るもので、地文には非結束の羽状縄文が横位に施文される。44は平行沈線文の地文上に、蛇行隆帯文を貼付するもので、この隆帯文が部分的なのかは判断されない。43は器形及び口縁部貼付文が第2図6と同様であり、近接した遺構内から出土していることから、同時期と認定されるであろう。また、44は八木前遺跡から出土しているが、地文に平行沈線文を施文することから、諸磯c式系等の要素と大木5式的な要素とが融合しているものと思われる。

第IV群土器 (第2図45~49)

捺糸文を施文するものを一括する。地文に捺糸文を施文する土器群は、該期では円筒下層式に見られる要素であり、在地系土器群にはその要素が存在しないことから、第IV群土器を円筒下層系土器群と把握した。口縁部の造りは第II群土器と同様やや幅広 (45) と幅狭 (47) の段帯部があり、口縁裏の削り状の整形も同様である。47の口縁部には、第1図40と同様の押し引き刺突文が施される。第II群土器と第IV群土器が八木上遺跡上位段丘面上の土壌や住居跡で共存する事実から、同一段階における異系統土器群の融合であること

は確実である。46は段帯部を持たないにしても口縁部に横位の捺糸文を施文し、口縁部文様部を設定している。48は捺糸文本体の末端処理が任意されているが、明瞭な木目状とはなっていない。円筒下層式土器群の中での位置付けは難しいが、d式よりも若干古相の円筒下層c式に関連が深いものと思われる。

2. 土器群の編年の位置付け

八木上遺跡を中心として、他の収録遺跡出土土器群を分類し、おおよその系統性と時間的な関係について、土器群や出土地点の相違から検討を加えてきた。I群1・2類は主体となる時期ではなく、おおよその編年的な位置付けを行っただけで、詳細な検討には値せず、今後の検討課題としておきたい。

また、2類と3類との関係についても不明瞭な点を残し、若干出土地点が異なるのみで、本遺跡群においては両者を検討するに十分な状況とは言えず、積極的には論じられない。

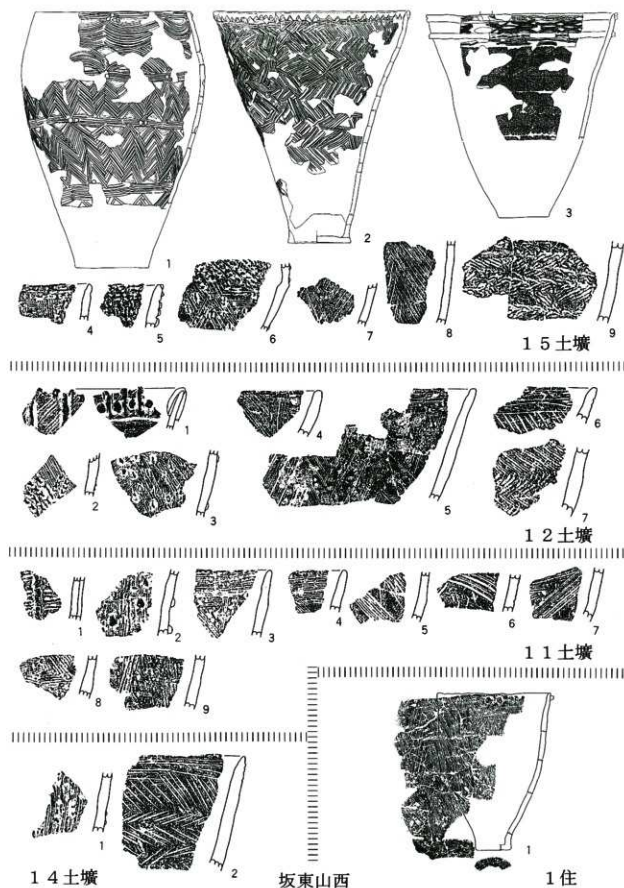
I群4類土器とII群~III群土器は、八木上遺跡や周辺の遺跡で良好な共存関係が得られている。それらの事例と比較検討しつつ、I群3類土器と4類土器との関係についても検討してみたい。

まず、県南西部である八木上遺跡の周辺では、圏央道の関係で調査された坂東山西遺跡 (鈴木1996)、と金井上遺跡 (栗岡1995) で良好な土器群が遺構から出土している。両遺跡とも、八木上遺跡から約2km以内に位置しており、遺跡間の関係が把握される遺跡群である。

坂東山西遺跡 (第3図)

第15号土壌からI群4類とII群土器、I群3類土器が出土している。1は樽形の器形で、多段の横帯区画内に集合沈線文のレンズ状文と鋸歯状文を施文するもので、文様間に印刻文を施し、区画線部分に2個対の円形貼付文が単位文的に配される。I群4類b種に、II群の印刻文が施文されたものである。このI群とII群の融合関係は、2、3にも見られ、2は口縁段帯部に連続三角印刻文を施し、胴部にやや崩れた横位羽状の

第3図 埼玉県西南部地域出土土器(1)



第4図 埼玉県西南部地域出土土器(2)

